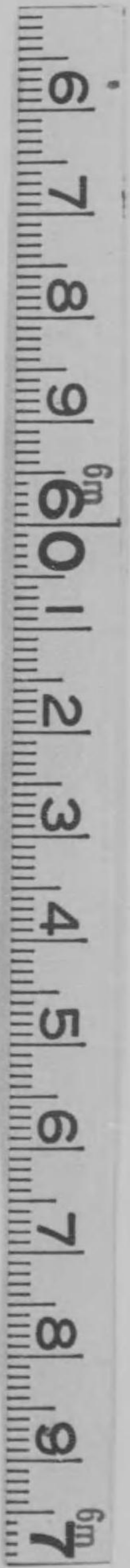


393

594

名古屋物産字彙

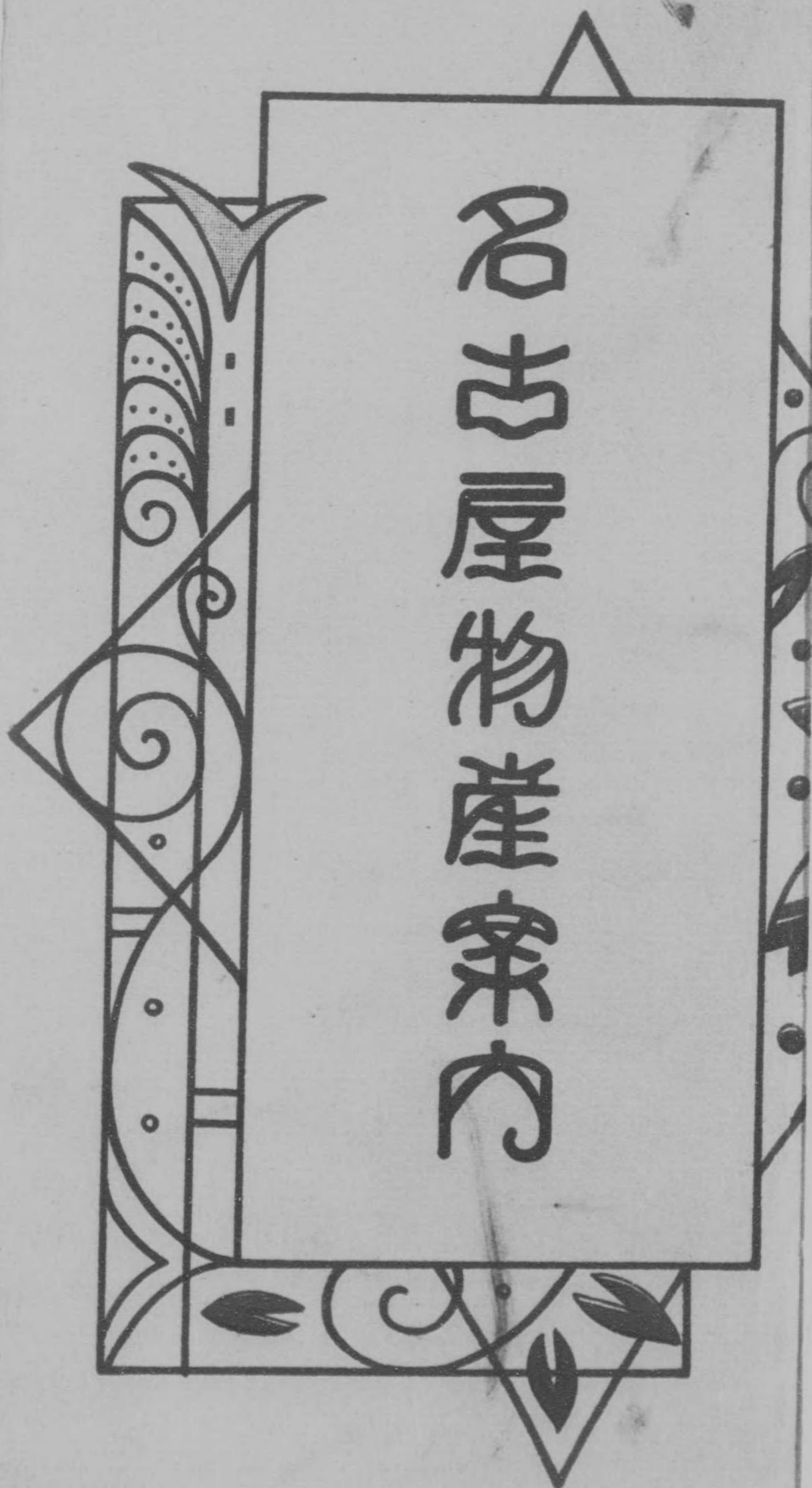


始



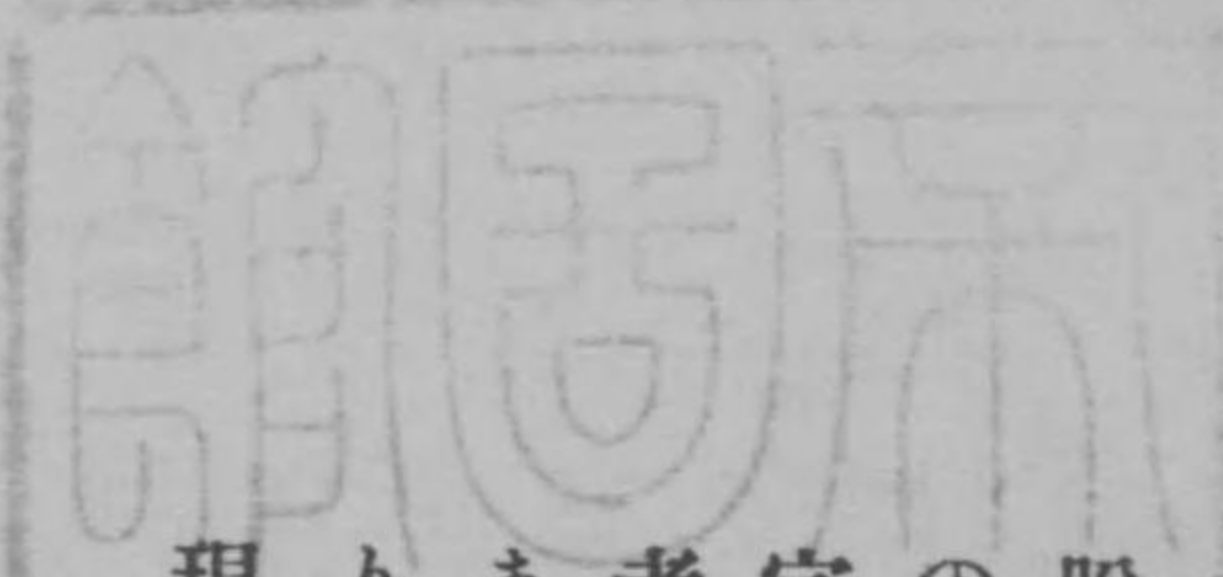


名古屋物産案内





393-594



序

本書は執務の餘暇匆忙の間に編纂したるものなるを以て、自然誤謬  
 脱漏あるを免れず、就中各商品の沿革に付きては之を精査探究する  
 の時間を有せず、主として名古屋市の沿革に據りたるも、未だ  
 完全と稱する能はず、時に意外の誤謬あるやも知れざれど、一に編  
 者の無識と不敏とに因る。幸に御叱正を得ば後日復改訂するところ  
 あるべし。尙掲記の各會社商店は孰れも信用ある代表的のものに  
 り聊か推賞の意味を包含せり。讀者本書に依り當市物産の沿革並  
 現勢の大體を知るを得ば、編者頗る之を光榮とす。

大正十二年十一月一日

編者識

タ所寄贈本

大正  
 13. 1. 8  
 寄贈



目次

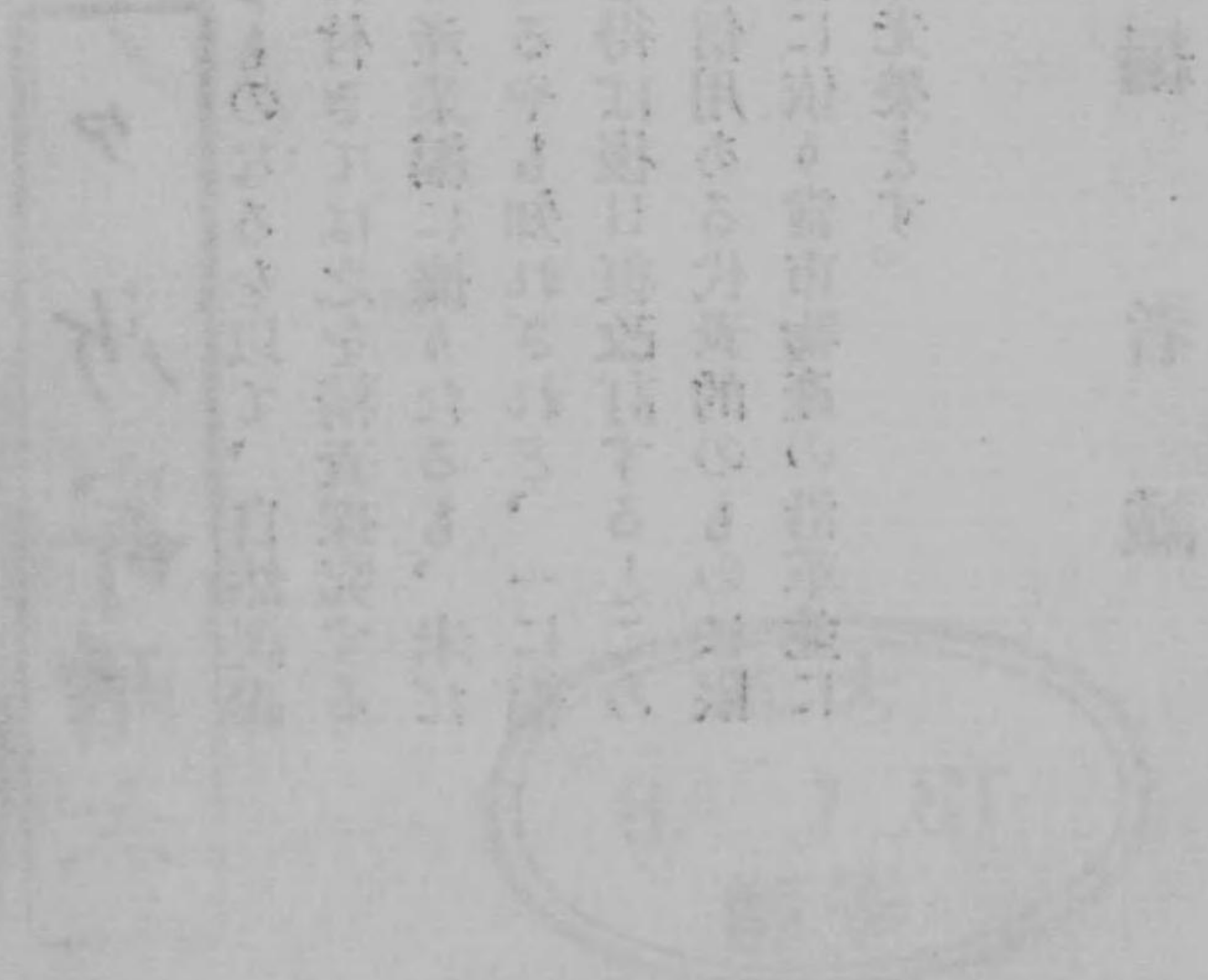
一、生 絲 . . . . . 一  
 中央製綿株式会社—二

二、燃 絲 . . . . . 三  
 帝國燃絲織物株式会社—三

三、綿 絲 紡 績 . . . . . 四  
 東洋紡績株式会社名古屋支店—六、名古屋紡績株式会社—六

四、絹 絲 紡 績 . . . . . 七  
 東京モスリン紡績株式会社名古屋絹紡工場—七

五、輸 出 綿 布 . . . . . 八  
 服部與合名会社—九、合名会社宮木商店—九、株式会社服部商店—一〇、  
 豊田紡織株式会社—一〇





六、國產絞	岡田合名會社—一二	二一
七、絹織物	帝國繅絲織物株式會社—一三	二二
八、セ	株式會社愛知物産組—一四、御幸毛織株式會社—一五	二三
九、製絨	東京モスリン紡織株式會社名古屋製絨工場—一六	一五
一〇、英ネ	尾關毛織合名會社—一七	一七
一一、モスリン	森織布株式會社—一八、名古屋モスリン株式會社—一九	一七

三、製袋	服部與合名會社—二〇	一九
三、綿毛布	渡邊毛織合名會社—二二、關尾紡織合名會社—二三	二〇
四、莫大	合名會社猪村商會—二三、村岡メリヤス製造所—二四、宇佐見メリヤス商會—二四	二三
五、夕オ	水越源次郎—二五	二五
六、漁網	合名會社網太商店—二七、愛知製網合資會社—二八	二六
七、刺繡	大藪ミシン工場—二九	二八



一八、製 綿	二九
名古屋製綿株式會社—三〇、名古屋綿業株式會社—三〇、合名會社國枝製綿所—三一	
一九、織 機	三一
豐田式織機株式會社—三三、野上機械工業株式會社—三三	
二〇、唧 筒	三四
合資會社小澤鐵工所—三五、名古屋唧筒株式會社—三六、合名會社鈴木鐵吉商店—三六、川本製作所—三七	
二一、車 輛	三七
日本車輛製造株式會社—三九	
二二、機 械	三九
水工社—四〇、木下鑄造鐵工所—四一	

二三、乾 燥 機	四一
株式會社帝國乾燥機製作所—四二	
二四、陶 磁 器	四三
日本陶器株式會社—四四、株式會社名古屋製陶所—四五、合名會社淺井竹五郎商店—四六	
二五、磚 子	四六
日本磚子株式會社—四八	
二六、タ イ ル	四八
千種製陶合名會社—四九、不二見燒合資會社—五〇、佐治製陶所—五〇	
二七、寶	五一
安藤七寶店—五二	



二六、硝子	五三
石塚製塲所一五四、株式會社名古屋硝子製造所一五四	五三
二九、セメント	五五
愛知セメント株式會社一五五	五五
三〇、燐寸	五六
福田燐寸合資會社一五八	五六
三一、一閑張	五八
黒田忠讓商店一五九、成田久助商店一六〇、伊藤元商店一六〇	五八
三二、味噌、溜、醬油	六一
名古屋味噌溜株式會社一六三、「蜂印」醸造元峰須賀光次郎一六四、味噌溜醸造業森本金十郎商店一六四	六一

三三、清酢	六四
合名會社笹田商店一六五	六四
三四、清酒	六五
清酒菊元世廣瀨合名會社一六七、美濃重商店一六八	六五
三五、菓子	六八
日出軒合資會社一六九、三共製菓株式會社一七〇、數島製パン株式會社一七〇、龜末廣菓舖一七一	六八
三六、飴	七一
名古屋製飴株式會社一七一、尾張製飴株式會社一七二	七一
三七、製粉	七二
日清製粉株式會社名古屋支店一七四、名古屋製粉株式會社一七四	七二



三、漬物	七五
<sub>1</sub> 雪漬物店淺井藤七	七五
成田友次郎	七六
三九、罐詰	七六
名古屋漬物製造合名會社	七七
合名會社中村鎌吉商店	七八
四〇、製材	七八
淺井製材株式會社	八〇
合名會社加周商店	八一
合資會社白松製材所	八二
山岸製材株式會社	八二
四一、ベニヤ	八三
合名會社淺野木工場	八四
新田ベニヤ製造所	八四
四二、扇子	八五
加納扇子店	八六
中村扇子店	八七
水野商事株式會社	八七

四三、提灯	八八
中善合資會社	八八
中村合名會社	八九
小柳商店	八九
四四、人力車	九〇
林製車場	九〇
四五、籐製品	九一
合資會社畑市商店	九二
鬼頭鉄次郎商店	九三
四六、自轉車	九四
株式會社岡本自轉車自動車製作所	九五
長谷川自轉車商會	九六
四七、飛行機	九七
愛知時計電機株式會社	九八
三菱内燃機株式會社	九九
名古屋製作所	九九



四、時 計 . . . . . 九九

合資會社高野時計製造所—一〇一、明治時計製造合資會社—一〇二、尾張  
時計株式會社—一〇二

四九、蠅 捕 器 . . . . . 一〇二

尾張時計株式會社—一〇三、名古屋商事株式會社時計部—一〇四

五〇、製 蠅 器 . . . . . 一〇四

物産共同合資會社—一〇五

五一、樂 器 . . . . . 一〇五

鈴木ヴァイオリン工場—一〇七、中惣商店—一〇八

五二、佛 具 . . . . . 一〇八

ひろ屋高木仁右衛門—一〇九、合名會社がざりや増田佛具店—一一〇、合

名會社井上商店—一一〇

五三、綑 帶 材 料 . . . . . 一一一

合名會社渡邊商店—一一一、太田合名會社—一一二、合名會社松村商店—

一一二

五四、護 謨 製 品 . . . . . 一一三

日東護謨製造株式會社—一一四、千歲護謨製造株式會社—一一四

五五、捺 染 . . . . . 一一四

浪越形染社堀尾釜次郎—一一五

五六、玩 具 . . . . . 一一五

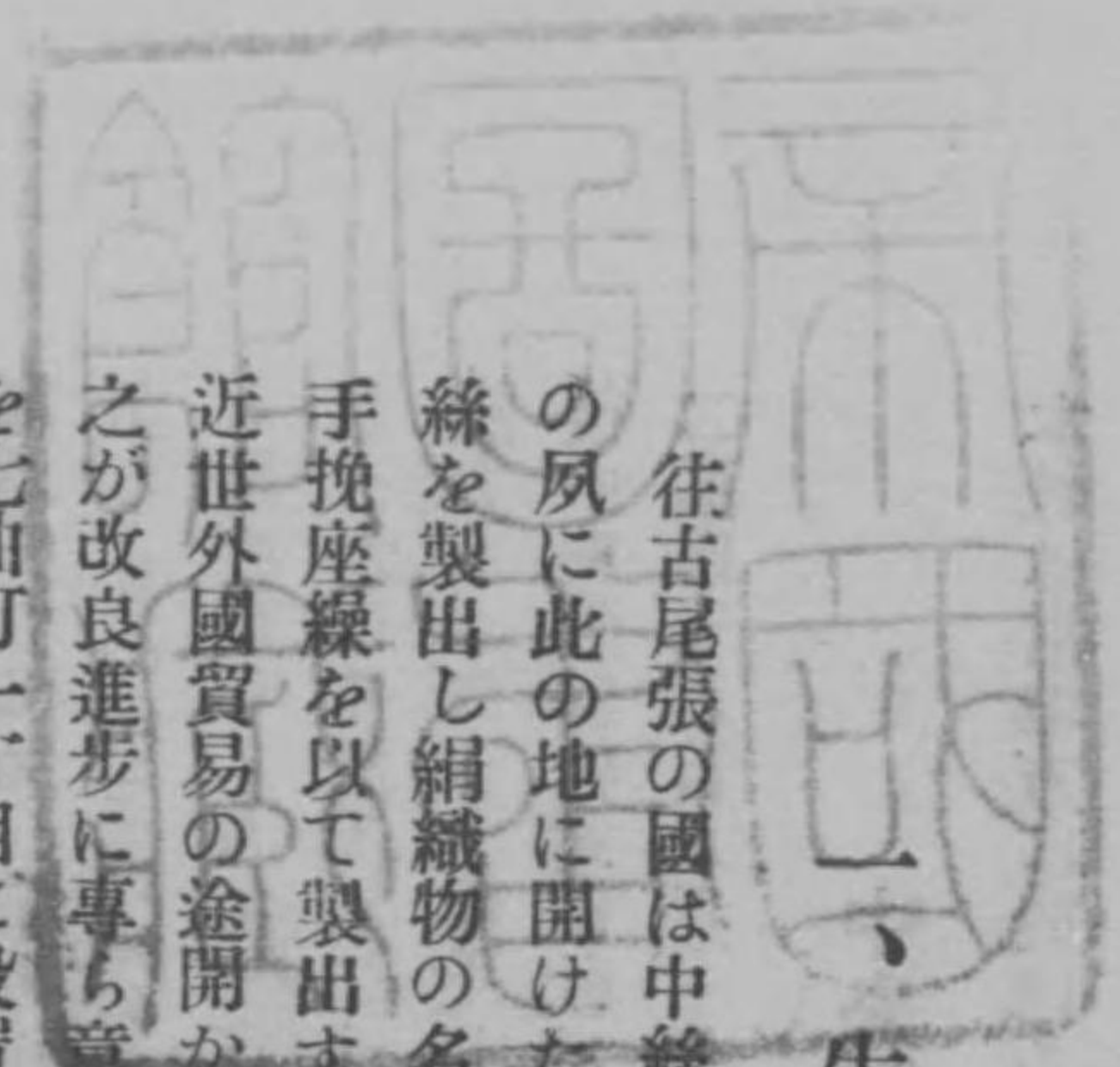
合名會社岩田商店—一一六



五、鼻緒	高木合名會社—一一七、服部商事株式會社—一二八	一一六
五、履物	合名會社長屋商店—一一九、名倉乙治商店—一二九	一一八
五、塗箸	丸善塗箸店—一二一、管鎌商店—一二一	一一〇
六、足袋	吉見株式會社—一二二、株式會社西川商店—一二三	一一三

## 名古屋物産案内

### 名古屋商業會議所編



#### 生絲

往古尾張の國は中絲を以て調物と定められし事延喜式に見ゆ。されば製絲事業の夙に此の地に開けたりしを知るべく、殊に丹羽、葉栗の兩郡は最も古くより蠶絲を製出し絹織物の名遠近に聞えしと雖も、尙綿絲と同じく婦女子の副業にして手挽座繰を以て製出するに過ぎず、其の産額も從つて僅少なるを免れざりしが、近世外國貿易の途開かれてより以來、生絲は我が輸出品中の大宗となり、政府亦之が改良進歩に専ら意を注ぐに至れり。愛知縣に於ても明治十年七月養蠶製絲場を七曲町一丁目設置し、群馬縣より製絲熟練の工女を傭聘し廣く生徒を募集し座繰製絲の法を講習せしめ、以て斯業の進歩を圖らんと欲したるが、之を明治十



三年廢止するの止むなきに至り、祖父江重兵衛氏、士族婦女子に授産の目的を以て繼承したるも、當時絲況の不振に禍せられ十五年遂に之を廢止するの餘儀なきに至る。其の後三河刈谷町の人太田平右衛門氏、熱田旗屋町に製絲工場を設立したるも是亦幾年もなくして業を廢せり。然れども當時郡部に於ては器械製絲工場續出し、本市に於ても二十一年十月に至り、太田確造なる人樟木町に太田組製絲場を設立し、二十九年七月三井物産組は西春日井郡金城村に名古屋製絲所を設立し、後中央製絲株式會社、近藤製絲所等の設立せらるゝあり、大正十年に於ては産額二萬四千八百八斤、價額四百十九萬一千四百一十一圓に上る。

#### 中央製絲株式會社

本社は當地方に於ける代表的輸出生絲製造會社にして横濱表に於ける格付は總て「最優等」格なり、其最も特長とする處は原票の儘輸出さるゝ點にて其工場名は夙に歐米需要家の腦裡に透徹し工場指定を以て注文さるゝ等本邦當業者中稀に擔ふ處の名譽なりとす。現在工場、佐屋川工場、村瀬工場、幡豆工場、細谷工場、年

産額拾五萬斤に達す。

#### 一、 撚 絲

洋式撚絲機械の輸入せられしは明治六年の事にして爾來各地に撚絲工場を立つるものあり、市内瀧兵衛門、瀧定助、春日井丈右衛門氏等織物生産地たる本市に於て不完全なる手撚絲を以て製織に従事しつゝあるを慨し、二十九年二月資本金五十萬圓を以て撚糸會社を西春日井郡金城村上名古屋に設立し三十年十一月開業せり。茲に機械撚糸の端を開き前記撚絲會社の發展して資本金三百五十萬圓の帝國撚絲織物株式會社となれる外大正十年には東洋撚絲株式會社設立せらる。

#### 帝國撚絲織物株式會社

西區上名古屋町に在り。明治二十九年帝國撚絲株式會社創設、爾來生絲、玉絲、柞蠶絲の撚絲製造販賣、受託賃撚業を營み社運の發展と共に絹織物業を兼營し、帝國撚絲織物株式會社と改稱、本邦機械撚絲製造業の鼻祖として名高し。撚絲種



目は片撚、二諸、三諸、四諸、輸出向縮緬用撚絲其他各種、常に製品の改良に努め好評噴々たり。

### 二、綿絲紡績

名古屋市及び附近に於ける綿絲紡績業は、今や阪神地方と共に天下を二分し互に覇を争ふの状態に在り。而して起源は明治十二三年の交に存し、村松彦七、祖父江重兵衛、岡谷惣助氏等八名が機械紡績業を起すべく十三年二月九萬六千圓を以て四千錘四十馬力の紡績機械一式を外國に注文し、十二萬五千圓の資本を投じて木曾川の水力を利用し之を經營せんとしたるに端を發す。然るに精査の結果右計劃は水力に依れば工事至難、火力に依れば石炭の供給意の如くならざるに逢着し遂に十五年九月危く中止の運命に陥らんとしたるが、政府及び縣令の熱心なる勸誘あり、村松彦七氏等十六年三月正木町に工場を建築し名古屋紡績會社と稱し翌年一月より事業を開始せり。是れ本市に於ける機械紡績事業の創始にして當時資本金三萬四千七百圓、錘數四千、職工百八名を使用せり。其の後二十年三月に至

り奥田正香氏等資本金五十萬圓を以て熱田尾頭町に尾張紡績株式會社を創立し、一萬五千錘を設備し二十二年七月營業を開始す。而して幾何もなく同社は濃尾の大震に遇ひ全工場を破壊せられたるが、二十五年五月再築し、錘數一萬五千三百二十八錘、職工千二十四人を使用す。越えて二十六年十二月又廣井町に三重紡績株式會社愛知分工場設置せられ紡績の外織布をなす。尙之に次で附近郡部に續々同業會社の設立あり、生産額二十二年に比較し十年後の明治三十二年にありては約六倍半の百五十萬五千貫、價額三百三十餘萬圓に達し、販路亦内地は勿論支那朝鮮等に及び逐年發達したりしが、三十八年に至り各會社の分立は互に其の發達を妨ぐる事多きを以て奥田正香氏等合同説を主唱し、終に同年十月名古屋紡績會社及び尾張紡績會社の兩社は三重紡績會社現在の東洋紡績株式會社に合併せらるゝこととなり、從來の各會社工場を分工場となし、營業所を市内仲ノ町に置き本市を中心として各工場を經營監督することとす。其の後三重紡績は漸次發展膨脹して現在の東洋紡績株式會社となれるが、此の外歐州戰亂當時の綿絲布界異常の活況に伴ひ隨所に新設工場の設けらるゝあり今や名古屋紡績、近藤紡績、協同紡



績、菊井紡績、豊田紡績、愛知織物、帝國撚絲、服部商店紡績部を始め、富士瓦斯紡績、日清紡績、内外紡績等の諸工場を合して鍾數四十五萬鍾全國屈指の纖維工業地として、東洋のマンチエスターたらんとす。

#### 東洋紡績株式會社名古屋支店

本社は大阪市北區堂島濱通二丁目に在り、支店を名古屋市に出張所を東京、上海に置き工場數二十一、鍾數綿絲精紡六十五萬六千五百七十六鍾、絹絲紡績二萬三千三百十六鍾、綿絲撚絲六萬七千二百八十八鍾、織機一萬三千百九十六臺一ヶ年綿絲三十七萬五千捆、綿布二億一千五百五十萬碼、絹糸及紬絲十二萬六千貫を製出す。名古屋を中心として附近に散在せる工場數十一、此鍾數三十八萬九千六百九十六鍾、織機八千二百三十八臺、綿絲八番手より四十二番手二合に至る各種を供給し綿布は租布天竺綾木綿二幅並幅三幅金巾細布細綾等を製織加工の上内外の需要に應ぜり。名古屋支店電話代表番號本局二一四〇番

#### 名古屋紡績株式會社

本社は名古屋市南區八熊町に在り、資本金一千五百五十萬圓、龍鼓印の綿絲を始め白扇印金扇印赤扇印の絹絲及び其他の綿布を製造す。名古屋工場は南區八熊町、新潟工場は新潟市沼垂山の下、郡山綿絲工場は福島縣郡山町稻盛、郡山絹絲工場は福島縣郡山町麓山に在り。本社電話南一四九〇—一四九三番

#### 四、絹絲紡績

名古屋に於ける絹絲紡績は歐洲戰亂當時の好景氣に伴ひ、大正七年十一月資本金五十萬圓を以て東區千種町今池新田に設立せられたる名古屋絹絲紡績株式會社に依つて端を開かれ、大正八年東京モスリン紡績株式會社は地を東區上飯田町に相して同社名古屋絹紡工場を新設し、敷地六萬坪、絹絲紡一萬鍾、紬絲紡二千五百鍾を以て、大正九年四月より操業を開始し、當市絹糸紡績の有力偉大なる開拓者たるに至れり。

#### 東京モスリン紡績株式會社名古屋絹紡工場



東區上飯田町に在り、絹絲紡績と紬絲紡績を經營す。敷地附屬共六萬坪、大正八年起工、同九年四月より事業を開始す、絹絲紡一萬鍾紬絲紡二千五百鍾なり。目下増設計畫中明年は倍鍾となる、當市に於て大工場組織の絹紡は當工場創始者たり。電話東區三二六番、振替名古屋三〇四四番、本社の營業所は東京市日本橋區蠣殼町二丁目一番地

## 五、輸出綿布

本市に於て輸向廣幅綿布の製織を開始したるは、明治二十七年三重紡績株式會社が輸入防遏輸出獎勵の目的を以て愛知分工場内に綿布製織工場を設置したるに始り、爾來三十八年には名古屋織布株式會社起り、大正元年十一月服部商店は組織を株式會社に變更し、織布工場を南區熱田櫻田に設けて支那方面に輸出を開始し、續いて豊田紡織、菊井紡織、近藤紡績、愛知織物、帝國撚糸、宮木、服部與等の工場起り、歐洲戰亂當時の熱狂的好況時代の順風につれ各社とも風を孕んで矢の如く猛進し、以て現在の偉大なる綿布製織地方となれり。然り而して大正

九年四月の恐慌時代に際しても甚しき打撃を受くるものなく、今や靜に滿を持して放たず不日の活躍に備へつゝあり。年産額五千萬圓以上に達し、前途益々發展の勢あり。

## 服部與合名會社

明治二年の創業にして初め内地向加工綿布を取扱ひ、十數年前より輸出に志し生地綿布雜綿布及綿毛布を取扱ひたり。目下は粉袋用生地綿布類捺染用綿布類其他加工用綿布を全國の需要者に供給し、又天竺ジンス其他の綿布を輸出し年産五百萬圓に及ぶ。本社は製品の検査嚴重を以て斯業者間に鳴れり。六年前組織を改め合名會社とす。電話本局四四九番

## 合名會社宮木商店

本店は東區鶴重町に在り。當市屈指の綿布商にして名古屋綿絲布取引所會員たり。其の製造販賣にかゝる靈芝美人印祥鶴印の商標は世既に定評あり。工場は中



區廣路町に在り。本店電話東一四一一、一四一二、一四一三番、振替名古屋六三〇番、工場電話東二三八一番、振替名古屋三四〇番、代表社員宮木利左衛門氏。

#### 株式會社服部商店

本社は東區宮町一丁目十一番地に在り、熱田工場、櫻田工場、福井工場、小牧工場、古知野工場を經營し、輸出綿布、内地向生地、縞類、モスリン、輸出加工綿布、綿ネルの製造販賣に従事す。資本金一千万圓、本社電話東四一一七乃至一一二一番、振替口座名古屋二二〇〇番、大阪一三八九二番、専務取締役は三輪常次郎氏なり。

#### 豊田紡織株式會社

本社及び工場は西區榮生町字米田千七百十六番地に在り。資本金五百萬圓、名古屋市有数の綿布製造會社にして金巾及び細綾の製造を最も得意とし、その製品の優良なること斯界に定評あり。電話本局五三五、一五〇九、六九五番、振替

座名古屋三八番、常務取締役豊田利三郎氏

### 六、國産絞

名古屋市を中心に此の附近にて廣く販賣せらるゝ絞は、古くより鳴海絞又は有松絞の名を以て知らるゝ有松産のもの多かりしが、近年市内に於て製造せらるゝ所謂國産絞の勢力も決して侮るべからず。

名古屋に於て絞業を始めたるは慶應三年のことにして、下園町服部與右衛門なる人、身を木綿商に扮し日々有松に到つて絞の製法を習得し、森井半兵衛、岡田彦兵衛氏と共に絞業を以て細民婦女子の手業とせん事を藩廳に請ふて嘉賞せられ明治二年名古屋藩は國産役所を七間町一丁目に設立し、服部、森井の兩名を國産係に任じ、益々斯業の發展を奨勵し、國産絞と名付けて諸國に販賣し、自ら有松絞と區別するところあるに至らしむ。爾來同業者續出し世の嗜好に従ひ意匠の斬新と染色の改良とに留意し、三十四年名古屋國産絞同業組合を組織すると共に、益々製品の改良と販路の開拓とに努力す。大正十一年に於ては産額九十一萬九千



餘反、金額二百七十七萬餘圓に上れり。

#### 岡田合名會社

西區下園町二丁目に在り。當市國産絞問屋中老輔として知らる。商品は絞類一切、常に意匠の斬新、染色の改良、價格の低廉を圖り、一般の嗜好に後れざらん事を期す。販路は近縣を始め全國に普及し、到る所に歓迎せられ好評湧くが如し。電話本局七四三番、振替口座名古屋一一三四番、代表社員岡田彦兵衛氏

#### 七、絹織物

本市に於ける絹織物としては、博多帶、琉球緋、縞物、腰紐等あれき、輸出絹織物としては帝國撚絲織物株式會社並に川上絹布株式會社の佛蘭西縮緬等とす。帝國撚絲織物株式會社は明治二十九年の創立にして資本金三百五十萬圓、大正八年三月綿布工場をも新設し、川上絹布株式會社は大正十年十二月の設立にして社長川上貞、取締役福澤桃介氏等なり。

#### 帝國撚絲織物株式會社

各種織物製織染色整理精練受託賃業及紡績業を行ひ常に製品の改良を怠らず。織物は内地向として葵縞子、朱子服裏地、輸出向として佛蘭西縮緬、經緯縮緬、支那縞子及加工綿布主に本社製品を原料として確實優良なる製品を市場に提供し内地は勿論歐米を始め支那、印度、南洋、濠洲方面に輸出す、電話代表番號本局九一〇番

#### 八、セ　　ル

明治三十二年愛知物産組は、瓦斯絲或は絹絲紡績絲と交織したる小幅物の新規毛織物を製出す。地風柔軟にして且つ高尙なりしを以て非常の好評を受け、其の後漸次發展して明治四十年頃より愛知物産組及び愛知織物株式會社は苦心研究の結果、廣幅純毛セルを製織發賣し、大に世の稱讚を博したり。次で大小の工場勃興し、廉價物としては經に綿を用ひ緯に毛絲を織りて半セルと稱し、祖父江利一



郎氏は毛絹と緯とを經に交織してクラブ縮緬と稱するものを發明し、當時大に世の嘆賞するところとなれり。而して京都の人、外村宇兵衛氏は祖父江利一郎氏の苦心經營せる毛織物工場を繼承し、依然御幸の名を用ひ御幸毛織工場として専ら本セル、洋服地、膝掛等を製織し、大正七年組織を變更して御幸毛織株式會社となし、織機を増加し染色整理を兼營し、事業大に進展し、御幸セル、こたちセルの名今や天下に名高し。尙此の外セルを製織する者甚だ多く、内東區千種町尾關毛織合名會社及び中區松島町渡邊毛織合名會社等著名なり。

#### 株式會社愛知物産組

東區千種町に在り。明治十一年一月の創立に係り爾來事業の發展に伴ひ組織の變更、資本の増額、工場の擴張を行ひ以て今日の隆盛を見るに至る。其製品は城印セル、絹綿交織物、絹毛綿交織、ガルゼ等にして、其他各種染色、各種織物整理加工を爲す。販路は關東、關西各地の外支那、南洋方面に輸出せられ、製品優良の名高し。資本金額貳百萬圓、拂込額百貳拾五萬圓。

#### 御幸毛織株式會社

同社の創業は明治四十二年にして、爾來幾多の變遷を経て大正七年十一月現在の株式組織に改めたるものなり。現在資本金壹百萬圓、六拾五萬圓拂込なり。其製産にかゝる御幸セルコート地及服地帽子地等は其品質優秀にして名聲斯界に噴々たり。年産額四幅物約貳拾萬碼二幅物約壹百萬碼にして、主として大阪、東京に仕向らる。職工四百數十名を使用し、製織第一、第二、第三、染色第一、第二、整理第一、第二の工場に分れ其設置せる諸機械は何れも優良なる外國製にして其設備又頗る整頓し、中京毛織工場中屈指の工場たり。染色整理部にては自製品の外別に受託課を設け外部よりの受託にかゝる各種原絲及製品の染色、整理加工を爲し縣下に於ける毛織染色整理加工界に重きを爲せり。

### 九、製 絨

由來當市及び當市附近はセル其の他の毛織物生産地として名高く、實に本邦輸



入毛絲中約其の三分の一を消費しつつある状態なるが、未だ洋服地の製織盛ならず、僅に日本織物工業株式會社(東區新出來町)がメルトンを野々垣市太郎氏(中區葛町)がサージを、御幸毛織株式會社が帽子地用及び服地類を製織しつつある外、特に専門に大規模生産をなすものなかりしが、有力なる東京モスリン紡織株式會社が東區下飯田町に土地五萬坪を撰び大正十年起工、同社名古屋製絨工場を開始するに至つて、當市に毛絲紡績並に撚絲、製絨事業創始せらるゝに至れり。將來セル、英ネル其の他の毛織物と齊しく羅紗も縣下に於ける重要な特産物たるに至るべし。

#### 東京モスリン紡織株式會社名古屋製絨工場

毛絲及羅紗地類製織の目的を以て東區下飯田町に五萬坪の敷地を占有し、大正十年六月起工、今や其第一期計畫としての新設工事殆ど落成を告げ、其毛絲紡績並に撚絲部は已に製造を開始し、織部も亦將に着手せんとす。蓋し中京に於ける新業の率先者也。電話東三〇〇四番

### 一〇、英ネル

英ネルは其の名の如く専ら外國より輸入せるものなるが、需要の漸次増加するに従ひ之が製織を企劃し、大正四年伏原文次郎、後藤捨五郎の兩氏先づ製織を始め、爾來尾關誠一氏等之に手を染むる者漸増し、毛織物の製織を業とせる者亦多く之が製織をもなしつつあり。小兒の合着用として最も高尚にして可憐なり。

#### 尾關毛織合名會社

東區千種町に在り。明治四十二年織物工場創設、爾來毛織物の内國需給關係並に輸入品との對抗に稽へ専ら英ネル、本セル等の優良品を製織し、東西市場の好評を博せり。將來毛織物の需要必然増加すべきを以て小兒洋服地其他の用途に充さんが爲精巧優美なる製品を供給せん事を期し専心努力しつつあり。電話東三〇八番、代表社員尾關誠一氏

### 一一、モスリン



名古屋に於けるモスリン製織は從來微々として振はず、原料の不足と製織方法の幼稚とは將來到底發達の見込なしとせられたるが、大正十年一月に至り名古屋製布株式會社先づ之が製織を試み、次で同年二月森織布株式會社之に倣ひ、兩社協調技術の研究に販路の擴張に苦心し、漸次織機の全運轉を見ると共に製品も随つて優秀となり、大正十年六月名古屋製布は名古屋モスリン株式會社と改稱し名實共に堅固なる地歩を築き、森織布株式會社亦之が姉妹會社として飛躍をなすに至れり。斯くてモスリンの製織は日を逐ふて發達し、今や各市場に其の聲價を認められ、年産額參千萬圓、蓋し短日月に於ける發達としては其の急速顯著なる眞に驚嘆すべきものあり。然り而して從來の所謂手機業者は原料不足の爲め萎微振はざりしも、今や名古屋に於ける斯業者は純良なる原料を直接海外に仰ぎ、多年の經驗と低廉なる工費とを以て製織に従事するが故に、將來東西の諸大會社と拮抗し前途益々發展すべく喝望せらる。

#### 森織布株式會社

大正八年十一月の創業にして、東區千種町字仲田に在り。資本金五十萬圓全額拂込濟にして、織機臺數二百八臺、二號モスリン及び二十號モスリンを製造販賣し、一ヶ月の製織四十萬碼に達す。現重役は專務取締役森佐十、取締役深田卓二、前田桂次郎、監査役朝倉貞二、前田精、相談役中村米治郎の諸氏なり

#### 名古屋モスリン株式會社

南區熱田西町幣懸に在り。資本金五十萬圓全額拂込濟にして、大正八年一月の創立に係る。現主腦者は中村米治郎、森佐十、前田桂次郎、竹内彌吉の諸氏にして、森織布株式會社と共に名古屋モスリン界の爲に氣を吐きつゝあり。モスリン需要の増加と共に同社の前途は日と共に隆昌に赴き、販路亦製品優秀の爲め益々擴張せらるべし、電話南一三三七番

#### 一一一、製 袋

當市に於ける木綿製袋は約十五六年來の産物にして、北滿、上海等に對する小



麥粉袋の輸出に始り、歐洲戰亂中は米國品を哈爾濱、天津、上海方面より驅逐し其勢望甚だ當るべからざるものありき。其の後内地に於ける製粉事業の發達と共に之が供給に忙しく、今や内地、臺灣を始め滿鮮地方の製粉會社は、いづれも製袋の供給を當名古屋市より受くるに至れり。製造數一ヶ月百萬袋、小麥粉、麩、澱粉、穀粉其の他諸般の袋を産すること全國第一に位す。

### 服部與合名會社

綿布業に兼ねて本業を創始したるものなれば原料は最も便宜の地位にありて其原料製織には使用後貯藏耐久力運搬耐久力等に注意し、製袋法にも種々の工夫を施し、印刷機は特別装置の四版輪轉機を使用す。品質寸法印刷の正確積出期日の確實は最も本社の得意とする所なり。常市製袋業の沿革は則ち本社の沿革と同一なり。

### 一三、綿毛布

明治十六年玉屋町吉村富三郎氏本邦産原料を用ひて毛布を製造せんことを考案し、始めて綿絲を原料として試織せしが、容易に目的を達する能はず、漸くにして稍見るべきものを製織することを得たり。是れ實に本邦に於ける綿毛布製造の嚆矢にして其の後吉村氏は南久屋町田中徳三郎氏と共に専心本品の改良に力を盡し、二十六年始めてメカニツク織機械を應用し色絲を以て各種の模様を織出すに至り、又毛出の如きも從來チーゼルを用ひ人手を以て掻き出せしが、紀州ネル起毛機の例に倣ひて改良を講じ、三ヶ所に起毛場を設置して勞力を節し其の方法に一大進歩を與へたり。而して販路亦漸次擴張せられ、内地は勿論滿洲方面等へ輸出せらるゝに至り、三十三年五月には同業者の増加と共に名古屋綿毛布製造同業組合を設置して製品の改良と販路の擴張とを圖り、産額大正十年には數量四十三萬六千五百四十八枚、價額七十六萬五千九百五十七圓に達せり。製品は肩掛、寢臺掛、敷物、防寒用帽子等なり。

### 渡邊毛織合名會社



中區大坂町に在り。常時約二百臺の織機を運轉し、肩掛毛布等を製造す。特に肩掛は本社の特意とする所にして、其の裝飾房は新案登録二件を有し、尙年々之が新工夫に怠らず、配色圖案の高尙優美と地質の堅牢とは北海道、東北、北陸其の他各地方の顧客間に好評あり、毛布も亦内地を始め滿、鮮、支、印方面に需用あり。好評を受く。電話東三五五九番

#### 關尾紡織合名會社

同社は品質の優良と價格の低廉とを以て販路を擴張し、新案特許角卷は北海道東北地方に綿毛布類は滿鮮、北滿地方を始め印度、南洋方面に需要あり。大正七年組織を合名會社に改むると同時に設備を擴張し、三重縣龜山町に紡績工場を中區宮出町に起毛工場を市内各所に製織工場を有し、各種博覽會等に於て賞牌を受くる事數次に及ぶ。

#### 一四、莫大小

莫大小製造は明治十八年佐藤某が丸ゴム機械を以て靴下の製造に着手せしを以て起源とす。其の後明治二十一年伊藤傳七氏上長者町に莫大小肌着の製造並に販賣を開始したるが後傳馬町に移りて莫大小商會と稱す。而して四十年に至り名古屋起毛會社設立せられ洋式起毛機を設備し盛に製造をなせり。斯くて同業者増加し四十一年名古屋莫大小改良同志會を組織し、品質の改良と産額の増大とを圖りしより販路大に擴張せられ、現今に於ては製造業者二百十七、加工業者四十四、機械業者十一を數へ産額亦大正十年に於て百五十二萬一千八十三打、價格六百二十八萬四千六百七十四圓に達す。製品の種類は襯衣、ズボン、靴下、手袋等なり

#### 合名會社猪村商會

南區熱田中瀬町に在り。明治二十九年十月の創立にして製品優美堅牢にして、内國勸業博覽會及び共進會等に於て金銀牌を受領し、販路支那、滿洲、朝鮮を始め内地は東京、大阪及び東北、北海道、信越地方、近縣、市内に及ぶ。代表者猪村鎌吉氏は愛知縣莫大小同業組合長たり。



### 村岡メリヤス製造所

明治三十七年泥江町に創業す。歐米の最新機械を率先輸入し、製品の精巧は畏くも宮中の御用命を蒙り、大正十二年一月城北兒玉町に工場の新築と共に移轉す設備の完全と製品の優秀とは今や斯界の驚異にして、内地向輸出向共に顧客の間に好評あり。製品の種類は各種肌着及び腰巻、オーヴァスエツター等なり。電話本局六〇六三番

### 宇佐美メリヤス商會

中區仲ノ町二丁目に在り。明治二十三年十月の創業にして、莫大小鹿印の製造兼卸を業とす。製品は實用向を專一とし、品質の優等完全と價格の低廉とは四方に顧客を有し、販路北海道、越後、東京、大阪、丹後を始め東海道、岐阜、三重等に及び、信用ある老舗として取引甚だ盛なり。電話本局三一九九番、振替名古屋二七四四番

### 一五、タナル

明治四十三年當市に關西府縣聯合共進會開催せらるゝや、三河西尾町の人稻垣徳次郎氏當市に名古屋支店としてタナルの専門問屋を開設し、タナルの將來有望なるに着目し、西尾の本店を工場とし、水越源次郎氏を支店主任とし、製品の改良を圖ると共に販路の擴張に専心努力せり。當時タナルは悉く晒白タナルのみなりしが、獨逸染料を使用し晒縞タナルを製織し三笠タナルと名付け發賣せるところ各地に於て好評を博し、日英博覽會に出品して銀盃を受領せり。其の後需要次第に増加し、製造愈隆盛に赴きたるが大正六年三月稻垣徳次郎氏死去し、同年四月より水越源次郎氏事業全體を引受け大正七年末より名古屋監獄に織機二十五臺を運轉させ、巴縞タナルの名を以て先晒浮縞を製織發賣し、全國に好評を得、今や經營及び專屬工場三十戸に達し、中京名物の一に數へらる。

### 水越源次郎商店



西區袋町に在り。明治四十三年三月以來タタルの爲に奮闘し、店主自ら製織並に販賣に努力し、今や名古屋タタル界の第一人者として、斯業盛衰の責任を擔ふ製品頗る優美にして衛生に適し且つ耐久力あり。内地一般は勿論の事支那、南洋印度方面にも漸次確固たる地盤を築きつゝあり。電話東四七七〇番、振替名古屋二二六三番

## 一六、漁網



市内に於て漁網の製造に着手せる者を網太商店主山本太次兵衛氏とす。太次兵衛氏の先代及び先々代は知多郡須佐村(現今の豊濱町)に於て麻製漁網の製造及び販賣に従事したりしが、當主に至り日清戦後綿網の製造を開始し、明治四十年五月愛知郡愛知町に工場及び販賣場を設け機械を日本式本目結足踏機械より外國式蛙又結

足踏機械に改め、大正四年より歐露の注文頻々たるに會ひ、自ら苦心の末動力を用ひ得べき編網機を發明し、大正七年より原料たる撚絲の製造をも兼營し、大正八年の最好調時代に順應し、工場を擴張し以て無數の注文に應ずるところありしが、偶々露西亞に於ける革命と財界の動搖とより事業を縮少し、同店に店員たりし一部の者出で、愛知製網合資會社を組織す。産額大正八年百十四萬圓、同九年七十五萬圓、同十年十六萬七千餘圓なり。

### 合資會社網太商店

西區堀内町に在り。文化年間知多郡豊濱町に開業す。明治三十八年編網機械を据付、四十年營業部を名古屋に移す、其販路は内地一圓、北海道、樺太、朝鮮、西比利亞、沿海州に亙る。大正三年以來更に南洋、米、加、葡、歐露に輸出し、多大の需用は供給の伴はざる盛況を呈せしも大戦以來露國の混亂と歐米財界の變動に依り途絶し、目下我領土内の需要に應じつゝあり。



### 愛知製網合資會社

中區西日置町に在り。大正十年元網太商店總支配人山本伊嘉初め舊店員の一部を以て設立し、優秀なる職工を集め専ら製品の改良研究を重ね、今や各府縣水産試験場、水産漁業組合等の用命を蒙る事多く、内地は勿論臺灣、北海道、樺太、浦潮等より多大の注文を受け漸次隆盛に向ふ。笹島局私書函第一〇號、電話本局六三四七番、代表社員山本伊嘉氏

### 一七、刺

繡

刺繡の起原は詳ならざれ共、想ふに元祿、寶永の頃奢侈風流の事流行し、各種の衣装より舞臺車樂の裝飾、幔幕に至るまで刺繡を施し、上下互に綺羅を競ひしより需要頗る増加し、一大發展を遂げたるものと如し。而して其の後貿易品として發展し今年年産額四十一萬七千圓に上る。製品としてはストローヅ掛、テーブル掛、ハンカチーフ等多し。

### 大藪ミシン工場

東區吳服町三丁目に在り。大正五年の創業にして本市に於けるミシン刺繡の開祖たり、當時刺繡は専ら手縫なりしが現主實兄眞澄氏之れをミシンにより開始し大に名聲を博し爾來今日に及べり、目下同工場取扱品は洋傘を第一とし、カーテン、半衿、ハンカチーフ、風呂敷、シヨール、學生靴、草履場等なり、代表者大藪三郎氏電話東二五五六番

### 一八、製

綿

市内に於ける製綿業は舊式の弓打式より漸次機械化せるものにして、其の家内工業的設備より今日の工場經營に轉じたるは、明治三十年以降に於て紡績事業の勃興に伴ひ、其の一部の工程を製綿に應用したるに始り、爾來此の種業者の簇出となり、明治四十年黒門町國枝寅太郎氏製綿機を發明し、越えて同四十五年東區車道東町に名古屋製綿株式會社創立せられ、斯業は累年發展して大正十年には産



額八十七萬一千百四十八貫、二百二十一萬二千八百五十八圓てふ數字を示したり

#### 名古屋製綿株式會社

東區車道東町に在り。明治四十五年四月の創業なり、中入綿を主として蒲團綿、脫脂綿、衛生材料を製造販賣す、品質の優良價格の低廉を本旨とせる同社の製品は需要を喚起し、逐日繁榮の域に進み、大に業績の見るべきものあり、販路は内地より海外に及び、逐年盛況を呈す。振替東京二三八四五番、名古屋八四〇番、電略「ナセ」又は「ナ」

#### 名古屋綿業株式會社

所在地西區鹽町二丁目、電話本局二四九番、振替名古屋一六五番、明治四十年五月の創業なり。専ら製綿業、内外綿花各種紡績落綿、絲屑の賣買を爲す、薄利は本社の標語にして、熱心なる營業振りは世間に多大の信用を博し販路次第に擴張、社運日に盛大、商標(⊗)の名は洽く人の知る處なり。

#### 合名會社國枝製綿所

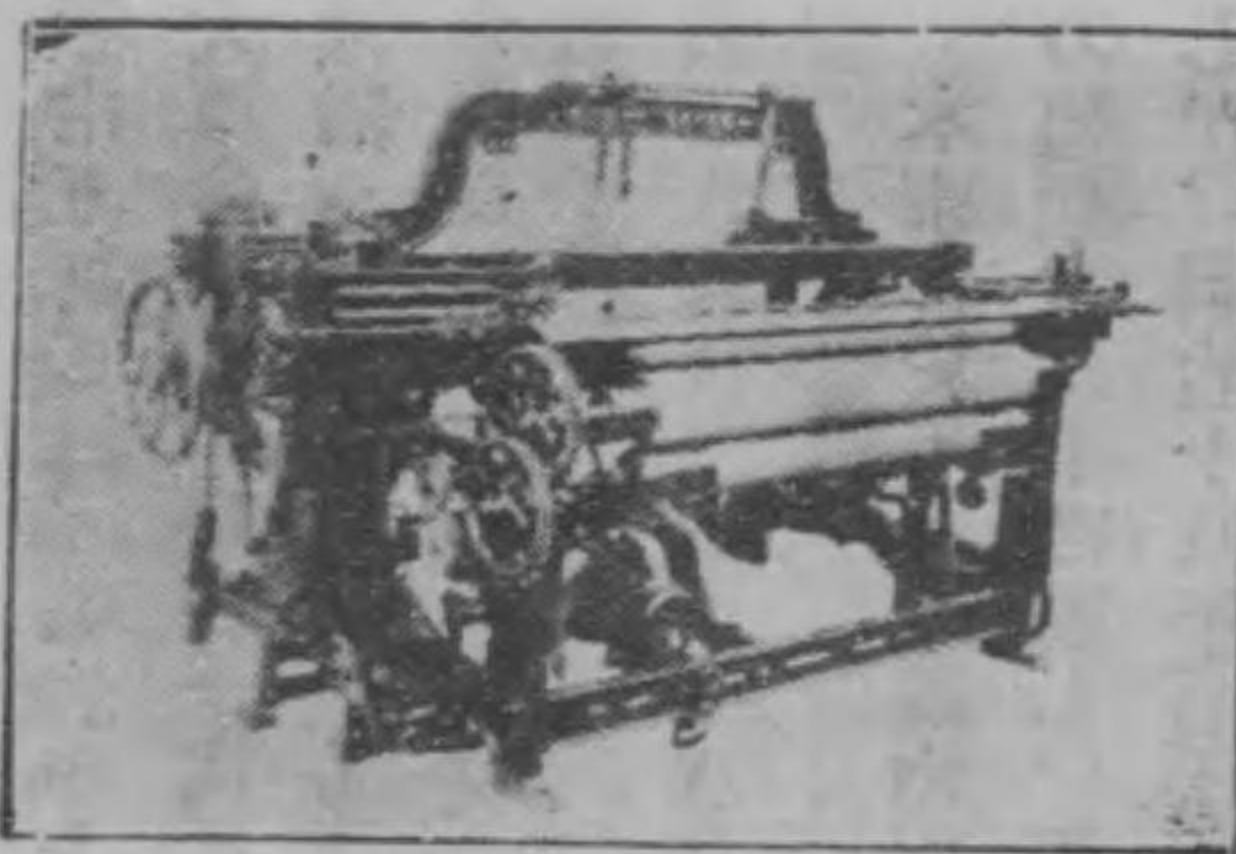
東區黒門町に在り。天保三年現所に創業す、從來専ら夜具綿の製造を爲し、年額拾五萬貫餘、明治四十年當主製綿器械を發明し、特許權を得て以來綿業界に一大革命を與へ現在全國的に使用さる。大正八年千種町に分工場を設け、判綿及小袖綿を製出するに至る。該工場は最新式、機械は英米の粹を抜くもの従つて製品の優良能率等他の追従を許さず。

#### 一九、織 機

本市に於て一般織物用を使用すべき器具並に其の附屬品の製造せられたるは其の起源古き事に屬し、從來手織機具は主として結城機具に手織カマチを用ひたりしが、明治十八年頃伏原辨之助なる人二尺巾の織物を製するには、到底從來のカマチにては能率のあがらざるを慨し、指物屋に命じて苦心の結果、一種のバツタンと稱する織機を發明したるに始り、漸次該機を利用するもの増加せり。然るに



明治二十七年の頃西陣より絞織機を取寄せ輸出毛布、着尺物、其の他座布圍地、鼻緒地等を製出する者現はれ、明治二十八年豊田佐吉氏、武平町に於て獨特の考案に依り織機を試製し、多年の辛苦と失敗との後、外國品と匹敵する豊田式織機の特許を得て、二三紡績會社に採用せられ、漸次需要増加し、三十九年島崎町に移り、四十年株式會社に組織を變更し、規模を一新すると共に盛大に製作を爲す事を得るに至れり。而して又大正五年御器所町向田に野上式織機の製作を營める野上機械工業株式會社の創立せらるゝあり、當市織機製造界は異常の發達を示せるが、殊に歐洲戰亂以來は英國品の輸入困難なると、織布業空前の大盛況とに因り、注文俄に激増し織機界の隆昌實に華々しきものありき。織布界幾分沈滞の感ある今日に於ても尙織機界は沈滞せず相當の地盤を有して活躍しつゝあるは偏に兩社の製品が優良なるに因るべし。年産額三萬臺以上に達す。



#### 豊田式織機株式會社

明治四十年資本金壹百萬圓を以て創立し、専ら豊田佐吉氏發明の織機を製作し大正五年大阪木本鐵工株式會社を合併し、爾來紡機製作にも着手せり。現今資本金參百萬圓、職工千三百、年産織機及準備機一萬二千臺、紡機三萬臺及之が傳導裝置一切を製作し、目下市外新川町に大規模の紡機製作専門工場を増設計畫中なり。本社を西區島崎町に置き、大阪市西區泉尾町に**大阪支社**を有す。織機は自働織機を始め自働送出裝置、投杼捍受裝置、ブレーキ外し等の特許を有し、天竺、金巾、シーチング、シャーチング、綾木綿等内地及輸出向の綿織物一切を製織するに適す、紡機は綿絲紡績を主とし、開棉機より精紡機に至る迄全部一貫して之れを製作す。

#### 野上機械工業株式會社

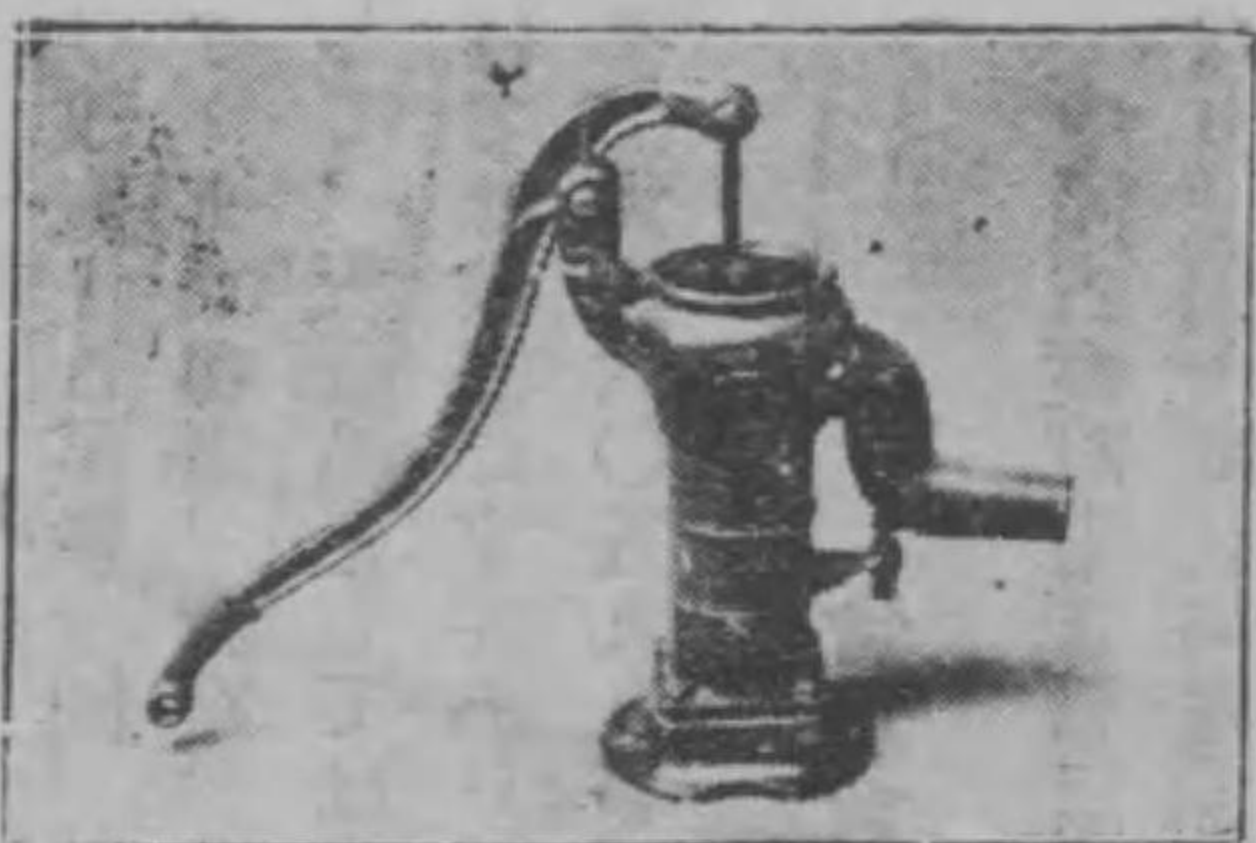
中區御器所町向田に在り。大正五年の創立にして資本金五十萬圓、野上八重治氏專務となり、瀧廣三郎、加藤勝太郎、瀧六郎氏取締役たり、相談役に瀧定助、



富田重助二氏を戴き専ら堅實なる業務の發展を爲しつゝあり、同會社は織機及準備機の製造専門會社にして、製品の統一期の正確なるは洽く世人の知る處なり而して同會社製作に係る織機の特徴は織物場風の味、製産能率の多大、價格の低廉なる點にありて他の追従を許さず、外國第一流の製品に比較し些の遜色なしと云ふ、以て其の精巧なるを知るべし。製産額一ヶ年一千臺、販路は内地一圓及支那各地にして、逐年其の販路擴大しつゝあり。電話南局長五四七番、五四八番

### 一〇、唧筒

名古屋には井戸唧筒、木製龍吐水の製造業者少からず、古來名古屋龍吐水の名遍く世に知られたりしが、明治十四五年の頃より洋式防火用唧筒及び井戸用水揚機製造せらるゝに及び其の價格低廉なりしを以て需要頗る多く、同業者逐次増加し産額次第に増大せり。斯くて三十五年九月合資會社日本唧筒會社、四十年十月合資會社小澤鐵工場設立せられ、四十一年又名古屋唧筒合資會社組織せられ、産額の増加と共に販路も從つて順次擴張せられ、以て今日の隆昌に達したり。大正



十年に於ては産額一萬一千餘臺、金額百四十二萬六千四百二十餘圓に達せり。

### 合資會社小澤鐵工所

中區古渡町六丁目に在り。ガソリン唧筒、消防用手押唧筒、消火器の製造會社なり。明治十年現在の場所に創業す。初め消火用龍吐水の製造を營みたりしが、明治十四年東京石川島監獄に於て佛蘭西式手押ポンプの試験あり、先代小澤鐵次郎氏縣より見學を命ぜられ、歸來之が製造に着手す、是本市に於ける手押ポンプの元祖なり。

又特許小澤式ガソリン唧筒は大正元年同社の發明に係るものにして爾來兩者共改良に改良を加へ以て今日の聲價を博するに至る、今や兩者及消火器を合して年産額五十萬圓、販路は内地、樺太、北海道、臺灣、朝鮮、滿洲、支那に及ぶ。電話南六三七番、振替名古屋三八一三番、代表社員小澤半助氏



### 名古屋唧筒株式會社

中區古渡町七丁目に在り。明治三十五年合資會社を創立し、大正二年株式に組織を變更せり。各地共進會博覽會に出品し褒賞數十通感謝狀數百通を受領す。販路は日本全國到らざる處なく、當會社職長は創立以來從事せり、時世の進運に伴ひ改造する事數十回、特許を得る事五回に及ぶ、今同社の主なる製品を擧ぐればガソリン唧筒、新案伊藤式消防用唧筒、土工用唧筒、船舶用唧筒、鑛山用唧筒にして、販賣品としては室内輕便消火器、消防器具一式を商ひ之れが作品の價値に付ては世既に定評あり。各府縣警察、師團、鐵道省御用達、振替名古屋四九九三番、大阪六〇五九九番、電話南一九五一番

### 合名會社鈴木鶴吉商店

中區古渡町七丁目に在り。龍吐水、雲龍水製作當時即ち明治十二年六月の創業なり。追々時代の進歩と共に漸次製品の改良を行ひ、店主自ら其の勞を取り今日

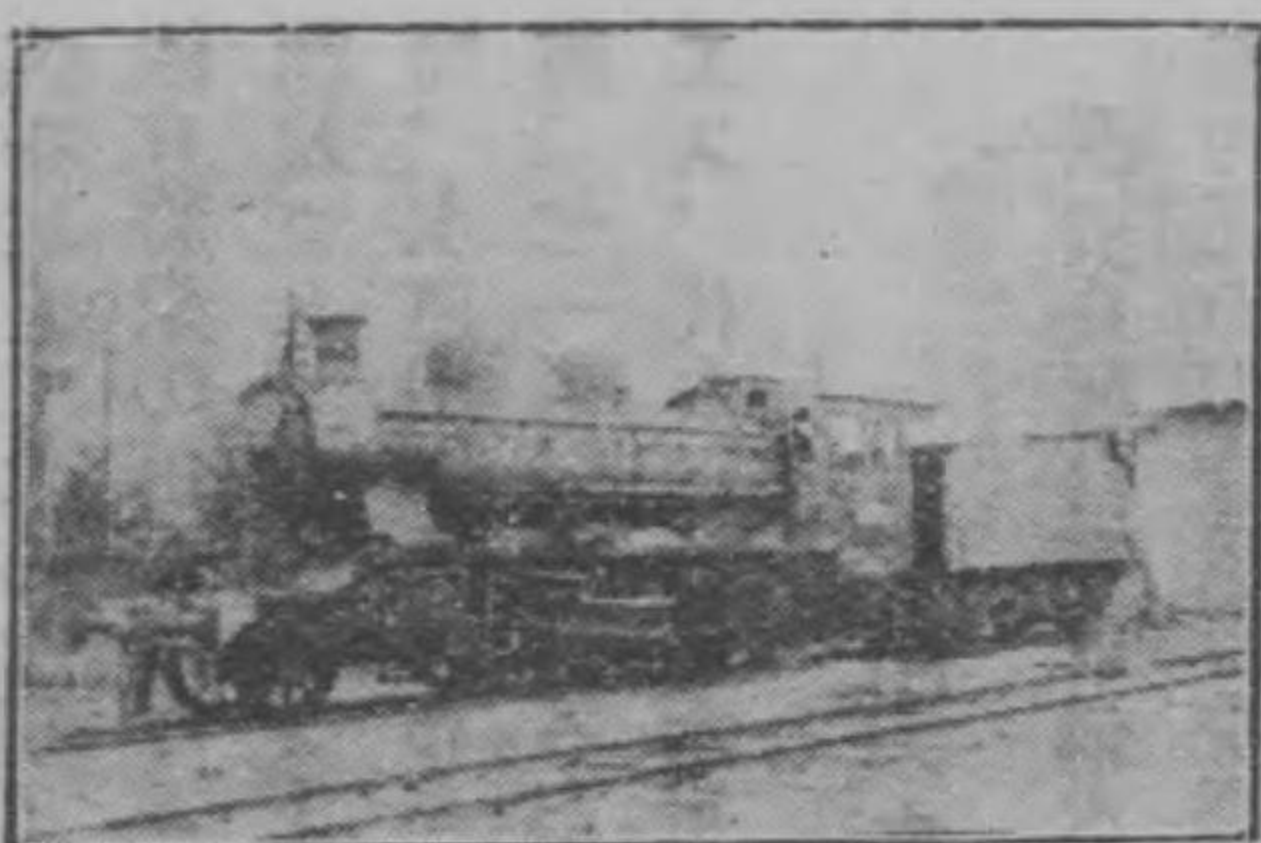
に至る、同社の平素主張する處は製品の最も堅牢なる點にあり、從て凡て實質本位を旨としたるを以て常に材料を吟味し、製作の上に細心の注意を拂ひ、之れに依り將來の信用を厚ふる營業方針を取れり。現在の製品は消防用鈴木式腕用唧筒及ガソリン唧筒を主とし、其他井戸唧筒、土工用唧筒、船舶用唧筒、鑛山用唧筒、水道用器具、布ホース、ゴムホース、消防用被服器具一式を販賣せり。電話南二七一番、振替名古屋五九八六番、大阪九三二六番、電略「ススキ」又は「ス」〇エス、代表社員鈴木定次郎氏

### 川本製作所

鐵製共柄自在口揚水唧筒、川本ギヤ式唧筒、川本式昇進唧筒、打込唧筒其他各種唧筒の製造販賣を爲し、内地は勿論臺灣、朝鮮遠くは樺太、支那各地に供給す從て川本式ポンプの名聲頗る高く、年産額十萬臺を超ゆ。營業所を中區大池町一丁目(電話東二四七番)に置き工場は中區東古渡町三丁目、電話南四〇二番、及南區熱田東町金山(電話南四九六番)に在り。



## 一一一、車 輛



鐵道其の他陸上運輸機關の發達と名古屋が木材の集散市場たるとに鑑み、將來車輛其の他附屬用品製造の有望なるに着目し、奥田正香白石半助氏等相謀り、明治二十九年八月資本金五十萬圓を以て日本車輛製造株式會社を設立し、堀内町に假工場を設けて製造に着手す。然るに之と殆ど同時に株式會社鐵道車輛製造所なるもの古渡町に設立せられ、兩社互に競争を開始したるが間もなく解散し、日本車輛は三十一年六月熱田東町に一萬六千餘坪の地を相して之に工場を建築し、日露戰後南滿洲鐵道を始め各地電氣鐵道、輕便鐵道の増設に一時大好況に際會し、三十九年一月資本金を六十萬圓より一躍三百萬圓に増加せり。大増資は一時減じて百二十萬圓となしたるも四十二年秋より大阪汽車製造合資會社、神戸の川

崎造船所と共に共同販賣制の下に海外輸出を圖り、鐵道省其の他より指定注文を受け、現時社運益隆昌、貨車、客車、電車の外、最新型の機關車等の製造をも開始し、成績の大に見るべきものあり。尙此の外合資會社名古屋電車製作所あり主として電車の製造に従事す。

### 日本車輛製造株式會社

南區熱田東町に在り。明治二十九年九月の創立に係り、當時は資本金僅に六十萬圓にして設備亦完からず、従つて其の成績も見るべきものなかりしが、明治三十七八年頃より車輛製作の注文幅輒し工場頗る多忙を見るに至り、資本金を明治四十年百二十萬圓、大正七年三百萬圓、同九年四百萬圓、同十二年一千萬圓に増加し、東京府下隅田村天野車輛工場を買収して東京支店とし、業務を擴張すると共に設備を改善し、最近機關車工場を新設し、客貨車の外機關車をも製造するに至り、一ヶ年の製造額一千三百萬圓に上る。工場敷地五萬一千二百餘坪、職工數二千五百名に達し、眞に誇るべき模範的大工場たり。社長瀧定助、副社長天野七



三郎、取締役兼支配人原口晃、同技師長山口金太郎氏

### 一一一、機 械

當市に於ける機械製造工業は各種唧筒類を始め、麵機、織機等見るべきもの少からず、確固たる基礎の下に營業せるもの數十に達し、中にも株式会社大隈鐵工所、株式會社中央鐵工所、株式會社東海機械製作所等著名なるが、近時電氣諸機械の製作も次第に盛となり、タービン、モーター類をも製作す。株式會社高岳製作所、愛知時計電機株式會社等其の代表的工場たり。而して近く東區大曾根町に三菱電機株式會社工場の新設を見れば、當市に於ける電氣諸機械の製造も活況を見るに至るべし。タービン水車に就ては左記水工社あり。

### 水 工 社

東區千種町字西裏に在り。大岡俊氏の個人經營にして、タービン水車を始め水力原動機一切の製作販賣を爲す。製品優秀にして價格低廉、其の聲譽は夙に世に

高く、販路亦内地到るところに及ぶ。實に同社の製品は又産業發達の原動機とも謂ふべく、同社の進歩と發達とは我が國文運の消長に至大の關係ありと稱すべし  
電話東二二七番

### 木下鑄造鐵工所

中區西日置町字石ヶ坪二五に在り。木下式自働製疊機の製造販賣元にして、同機は發賣後日尙淺きに拘はらず各地に多大の好評を博し、機械の全部が鐵製なるが爲め縮み、狂ひ等なく、又針臺堅牢にして絲締意の如く横針の絲潜に特別の裝置あり、時間と手數とを省き一人一日十五疊以上を製造し得、頗る便利の機械なり。電話本局六九六番

### 一一二、乾 燥 機

茲に謂ふ乾燥機は製糸用生繭を乾燥する物にして、多く今村品太郎氏の發明考



案に基き、株式會社帝國乾燥機製作所が大正八年七月設立せられ、右今村式乾燥装置の特許權並に營業權を買收し營業を開始するまで、當市に於ける乾燥機は主として前記今村品太郎の經營せる今村商會の手に依つて製作販賣せられたるが、同機は製糸業の進歩と發展につれ、漸次發發し、現今同機の製作に従事する者前記帝國乾燥機製作所、合資會社今村商會の外愛知工業株式會社の三あり。製造者各々發明改良に苦心するを忘れず、殊に帝國乾燥機製作所創製の帝國式無軌道輸送乾燥機の如き、今や完全の域に進めるものとして製糸界に好評を博せり。

#### 株式會社帝國乾燥機製作所

大正八年の創立に係り今村式乾燥機の特許權を買收し専ら之が製作に任ず、据付臺數五百臺、本邦乾燥機界の第一人者なり。更に最近帝國式無軌道輸送乾燥装置を考案し、特許を得て本春來製作發賣せるところ製糸家各方面の歡迎を受け今や注文全國各地より殺到し全力を擧げて製作に従事中なり。本店東區千種町西裏  
電話東二一八番

#### 二四、陶磁器



尾張は古來陶磁器製産地として全國の首位を占む。藩政時代には一部數寄者の賞翫に適すべく豊樂燒、夜寒燒等行はれしが、明治五年埃國博覽會出品の目的を以て服部杏圃なる者瀬戸に至り、西洋顔料を用ひて食器を製せしめたるを動機に輸出品の製造に従事する者漸く増加し名古屋市内に於ても瀧藤萬次郎、村松彦七、江副廉造氏等親しく海外に赴きて販路の擴張に意を注ぎ斯界に貢獻するところ尠からず、就中瀧藤萬次郎氏は東京又は横濱に支店を設置し直接に外國貿易の便を圖り又加藤梅太郎佐治春藏氏も之と相踵いで本市陶磁器の輸出に盡力す。

然り而して明治十一年巴里萬國大博覽會に瀬戸の陶器を出品し意外に聲價を博するや、爾來益々輸出品の製造をなす者増加し、瀧藤萬次郎氏の如き石川縣九谷の畫



風に模して外人の嗜好に投じ十六年東區南外堀町に彩磁工場を新設し諸工百餘人を養へり。是より輸出向陶磁器の繪付を業とする者非常に増加せり。尙此の外加藤梅太郎氏は二十二年中區七曲町に田代商店支店を設け松村八次郎氏は二十九年新榮町に松村硬質陶器合資會社を作り、森村市左衛門、大倉孫兵衛氏等は三十七年則武に日本陶器合名會社を設立して硬質磁器の製造に着手し、松風嘉定氏は三十九年白壁町に支店を置いて輸出向陶磁器の製造に着手し、田代市次郎、加藤梅太郎氏は越えて四十一年千種町元古井に千種製陶合資會社を組織し、四十四年に至つて飛鳥井孝太郎、寺澤留四郎氏等千種町に帝國製陶所を設立し、後組織を改めて現今の株式會社名古屋製陶所となる。大正十年製造戸數九十二戸、産額一千七十二萬二千四百七十五圓に達す。

#### 日本陶器株式會社

明治三十七年の創立にして本邦に於ける純白硬質磁器製造の開祖たり。建築起工の際原動力室の一部礎石の下に創立者森村市左衛門、大倉孫兵衛、村井保固諸

氏は署名せる左記宣誓書の一陶板を埋めて以て素志の記念とせり。

森村組創立以來日本陶器の完全ならざるを慨し改良の爲め盡瘁する事茲に二十有餘年今や我陶器をして歐洲の精品に比肩せしめ益完美の域に進め、以て我國の貿易を隆盛ならしめんが爲め茲に日本陶器合名會社を設立す。誓て至誠事に當り以て素志を貫徹し、永遠に國利民福を圖る事を期す。

是當社が事業經營上主義とする所、大正六年末組織を株式會社に改む。資本金貳百萬圓、工場敷地四萬貳千坪、使用人職工四千八百人、使用馬力八百三十馬力

#### 株式會社名古屋製陶所

明治四十四年の創立にして、初め資本金二十五萬圓の合資會社なりしが、大正六年株式會社に變更し、資本金を一百萬圓とし、専ら白地洋食器の製造をなす。品質の優良と圖案の巧妙とは歐米市場に其聲價を認めらるゝ所以にして、今や窯業界の權威として世評噴々たり。同九年資本金五十萬圓の中央窯業株式會社を買収し、衛生陶器の製造を爲す。輒近建築界の進歩に伴ひ注文殺到其需用を充すに



吸々たる状態に在り。本社東區東芳野町、電話東一一二五番、一一二六番。工場東區千種町菘月、電話東一一二七番、東區山田町、電話東七四三番、出張所東京市芝區源助町、電話芝六六八六番、神戸市磯邊通四丁目、電話三宮三一八一番、支店米國紐育市第五街二〇〇、社長伊藤守松氏

#### 合名會社淺井竹五郎商店

明治二十年先代の創業にかゝり、夙に支那貿易の開拓に心を注ぎ、天津に支店上海、香港に代理店を置き、支那商人間に重厚なる信用を博せり。歐洲戰亂以來マレイ半島、瓜哇、印度、濠洲等東洋の新市場に雄飛の機を捉へ店運隆々として現に同方面輸出陶磁器界の第一人者たり。東區東芳野町、電話東六八二番

#### 一五、磚子

我が國に於ける磚子製造は明治五年工務省に於て肥前有田の陶器業香蘭社に命じて試作せしめしに濫觴す。其後佐賀、京都、東京、瀬戸、會津の諸地方にても



其の製作に従事する者續出し、爲に電信及電話線路用低壓磚子は悉く以て内地製品を使用するに至れるが、明治二十年電氣事業の開始せらるゝや、之れに用ゆる高壓磚子は本邦製造者の技術幼稚にして製作し得ず、外國製品の獨占する處なりき。然るに明治三十八年に至り故森村市左衛門翁並に大倉和親氏は高壓磚子の輸入を嘆じ之れが防止を企劃し、芝浦製作所岸敬二郎氏の援助を受け、市内日本陶器會社に於て初めて製作に着手し、研鑽の結果翌三十九年一五、〇〇〇ヴォルト用並に二〇、〇〇〇ヴォルト用送電線高壓磚子を製作し得たり。之れと前後して京都松風工業會社に於ても高壓磚子の製造を開始し、爾來銳意研究の結果益々優良品を製出し、需要も逐年増加し、現今にありては全く外國品の輸入を防遏し海外への輸出を見るに至れり。



### 日本磚子株式會社

南區熱田東町(名古屋工廠の東)に在り。明治參拾九年日本陶器會社内に於て高壓磚子を製造したるに始まる。大正八年現在の處に工場を設け銳意品質の改良と産額の増加を計り、今や設備の整頓品位の優秀なる海内に冠たり。近來電氣界の發達と共に四時註文輻輳し繁忙を極む。出張所は東京(丸の内ビルヂング内)大阪(堂島ビルヂング内)に在り。

### 一六六、タイル

タイルは日本に於ては古來より敷瓦と稱し、同種類のもを各所にて製作し來りしも、其製法濕式なるが故に縮少の限度強きを以て、其製品寸法等正確ならず、稍粗雜の觀ありしが、明治四十一年歐洲製品と同一なる製法、即ち乾式に依り強壓力を以て製作するの技を創始したるは實に名古屋市内不二見燒村瀬亮吉氏を以て嚆矢となす。爾來同氏の研究日に進み、一般需要者の意を満すのみならず、

全く輸入品を防止するに至りたり。爾來年を経て淡路の淡陶舎、名古屋の佐治商店其他に於て同法式に依りたる製作者現はれ、現今内地は勿論國外にまで廣く輸出するに至れり。而して建築界の趨勢は愈々益々タイルを需要すべく、斯界の前途は光明の赫々たるものあり、名古屋市として之を特産品中に數へ得らるゝは、甚だ幸福にして感謝に辭なしと云ふべし。千種製陶合名會社の磁製タイル亦近來の一大發明たるを失はず。

### 千種製陶合名會社

東區千種町字内山に在り。元中區七曲町に在り。日の本燒と稱したりしが、明治四十一年一月此處に移轉し名を前記の如く改稱せり。從來輸出向陶磁器の製造を専門としたりしが、近來建築界の趨勢と一般是に用ひらるゝタイルの缺點とに着目し、技師長竹市五三郎氏を主任とし、日夜磁製タイルの完成に努めたりしが遂に完全なる乳白磁製タイルを發明完成するに至れり。右は從來一般のタイルの如き釉藥に鉛を用ひざるに依り如何なる高熱度或は零度下の場所に用ふるも、從



來のタイルに見るが如き貫入剝落等の憂無く常に完全なる特徴を有す製品には千筋、平面等あり、各方面に異常の好評を博し、今や注文の製造に忙殺せられつゝあり、製造能力年一千五百萬個、電話東二一一番

#### 不二見焼合資會社

本社は中區老松町七丁目、工場は同區廣路町石佛に在り。多大の製造力を以て營業せり。而して其製品に現はれたる意匠、圖案、技巧は共に進み一般需要者の嗜好に適し、他製品に優逸せるは不二見焼の誇りとする所にして正に斯界の權威者たるべし。本社電話東一六四三番、工場電話東一七六四番、代表社員村瀬亮吉氏

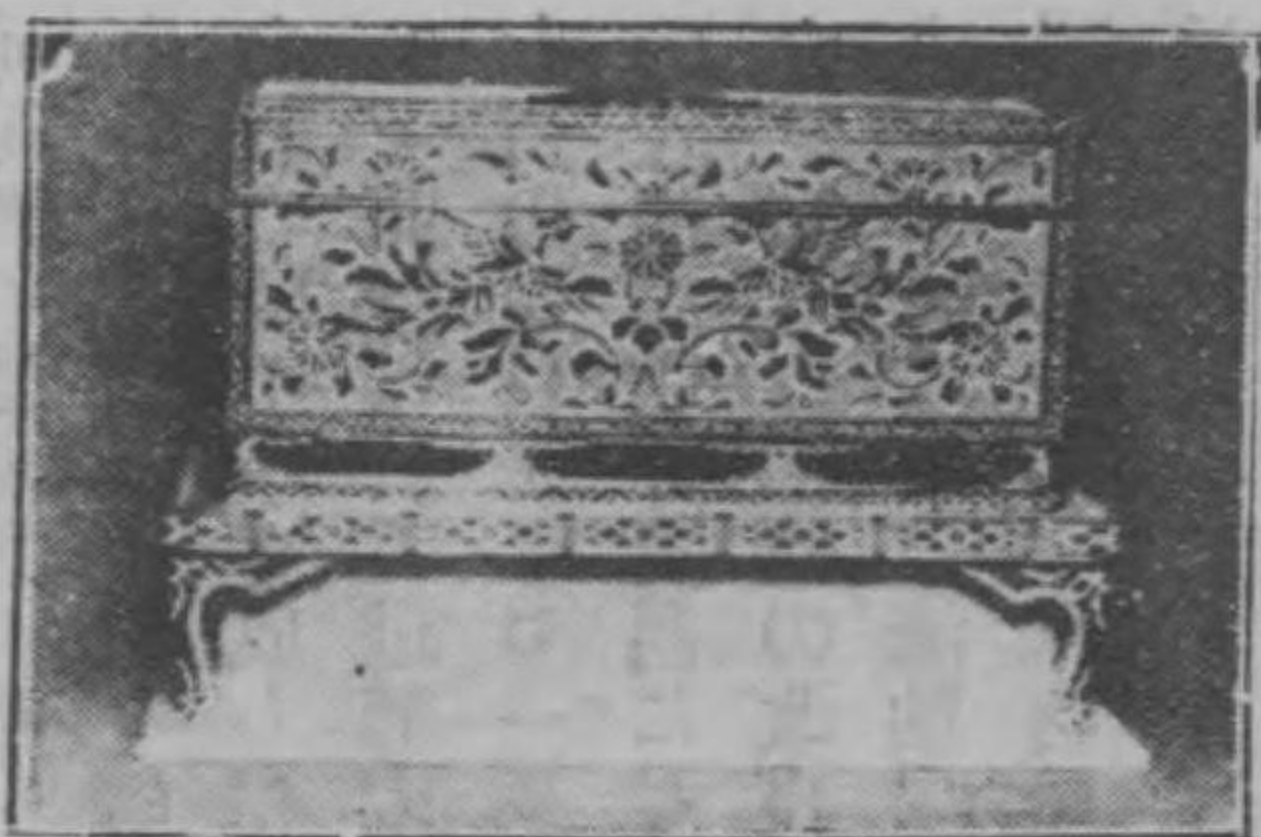
#### 佐治製陶所

父祖數代陶器商を營みウサミヤと稱す。タイル工場自營と共に佐治製陶所と改め、同業者間に重きをなせり。建築用タイルの専門にして宮内省の御用を拜し、

現今霞關御離宮御改築用タイルの焼立中なり。従つて品質荷口等に就ては東京、大阪市場に定評あり。所在は名古屋市東區中市場町三丁目、電話東二三四〇より二三四二番

#### 二七、七 寶

七寶は古くより其の術開け慶長承應の間、既に大に見るべきものありしが其の後徹々として振はず、天保年中に至つて尾張海東郡服部村に鍍金業梶常吉と云へる人あり、七寶の製法を發見せんとして日夜苦心し、終に筆筒墨臺等の文房具を製出するに至る。常吉氏技を嘉永六年遠島村林庄五郎に傳へ、萬延年間庄五郎又之を同村塚本貝助、同儀三郎に傳ふ。貝助出藍の譽あり。塚本甚右衛門等貝助に就きて學ぶところありしも精巧の品を出す能はず。其の後發達遅々として進まざりしが、明治四年鐵





砲町岡谷惣助氏、時の縣令井關盛良氏に勧められ酒井佐兵衛柴田久兵衛氏と相謀り各々資金三千圓を醸出して名古屋七寶會社を創立し、塚本甚右衛門氏を備聘し多數の職工を養成し相當佳良の製品を出すに至る。而して甚右衛門氏は東京アーレン商社に於て珽瑯七寶を研究し來り、五平藏町の川出柴太郎氏亦釉藥を改良し七寶の面目はより一新し、同社は一時海外の不況に疲弊せるも爾後數年海外需要の旺盛に暫時隆昌に赴きたるが後復不況に會ひ明治二十三年設立滿期と共に解散す。然るに釉藥の改良者川出柴太郎氏は明治十四年七寶製作所を開始し、浮出、盛上、模様及び流釉、窯變釉等を案出し、京都の人西山雪香氏本市に在つて七寶圖案に妙を得、八百屋町林小傳次氏の如きも各種の釉藥を發明し、矢場町安藤重兵衛氏亦斯界に貢獻するところ尠からず、大正十年に於ては製造戸數十戸、産額十二萬圓に達し、意匠、圖案、技術に長足の進歩を示し、今や誇るべき名古屋物産の一たると共に世界的美術品として其の名高きに至る。

#### 安藤七寶店

中區矢場町五ノ切に在り。明治十六年以來製造工場を設け、兄弟協力し内地の販路擴張を圖るは勿論、明治三十二年以後に於ては交互海外に渡航し、歐米各地の流行並に嗜好を調査研究し、歸來製造に注意する等、七寶の爲めに努力貢獻するところ少からず、明治二十五年以來は宮内省の御用達を命ぜられ、盛上、透胎寶石釉七寶等を創始し、製品の優秀と精巧とは内外に其の名高く、美麗見る者をして恍惚三嘆せしめざるなし。電話本局一一六六番、振替東京一二五二六番、店主安藤重兵衛氏にして、矢場町居宅の樓上には七寶の歴史を語る古來よりの参考品及び同店製品の見本を多數陳列す。

#### 二八、硝子

本市に於ける硝子製造業は明治元年谷半十郎が押切町に硝子業を營み玩弄品を製造したるに始り、四年又松平新平此の業を始む。後半十郎は武藏北品川の硝子製造所に入りて研究し、歸來藥瓶類の製造を開始す。同業者の漸増と共に製法亦進歩し、洋燈ホヤ、同油入、各種瓶類の製造は勿論、現今に於ては板硝子、ウオ



ツチガラス醫化用器等の製造あり。工場數十餘、名古屋硝子同業組合設立さる。大正十一年中の産額は數量百二十一萬餘、金額百二十一萬餘圓なり。

### 石塚製壘所

東區西二葉町に在り。三ツ星印の廣口ボンド瓶、コップ、インクスタンド、各種藥瓶及びホヤ、化粧品瓶等の壘類一切を製造し、内地は勿論廣く海外の需要に應じつゝあり。製品の優秀、價格の低廉は益々聲價を高め、常に當市硝子製造業の先驅として活動せり。所主石塚岩三郎氏は本會議所議員にして、電話は東三四六番なり。

### 株式會社名古屋硝子製造所

南區熱田東築地に在り。大正七年六月の創立にして資本金二十萬圓、内地向輸出向各種壘類の製造をなしつつあるが、特に同社の製品中特筆すべきは、專賣局認定の煙草陳列壘及び鐵道局認定の實用新案汽車茶壘の二なり。硝子製汽車茶壘

は此の頃従来の土瓶に代つて車中専ら行はるところ、衛生上好適品として旅客に歡迎さる。

### 二九、セメント

本市に於けるセメント製造業は明治二十年六月南區熱田白鳥町に創立せられたる愛岐商會の操業より始る。右愛岐商會は後發展して現在の愛知セメント株式會社となれるが、原料たる石灰石を岐阜縣赤坂町より取り粘土を愛知縣知多郡より引き製品優良、斯界に聲價を博しつつあり。而して大正八年發電所工用として名古屋電燈系の實業家に依り名古屋セメント株式會社南區熱田東築地に設立せられしが、大正十年豊國セメント株式會社に合併せられ其の工場となる。産額兩者を合し、大正十年に於て三十四萬七千七百九十樽、金額二百二十四萬三千七百四十二圓に上る。

### 愛知セメント株式會社



○社は明治二十年六月の創業にして、元愛知郡熱田町白鳥に在り。愛岐商會と稱したりしが、翌年伊藤博文公の斡旋に依り高島嘉右衛門、坂田伯孝、服部與三次の三氏協同出資して工場を擴張し愛知セメント商會と改め、同二十三年愛知セメント株式會社と改稱し、資本金を十二萬圓となし、越えて同三十年五十萬圓に増資し、工場を現所在地なる熱田東町に移轉す。其の後明治四十年及び大正七年の兩度に増資して現在資本金三百萬圓となし、製品の改良と能率の増進とを圖るべく、大正九年新工場を増設し新式回轉窯を運轉し、舊來の工場を廢止するに至る。現在年産額三十萬樽、製品均一優秀にして専ら内地の需要に應じ、夙に是等需要者には定評あり。取締役會長青木鎌太郎氏、取締役兼技師長堀江秀夫、同支配人吉村順助氏

### 三〇、燐 寸

名古屋に始めて燐寸を製造したるは明治十三年なり。十二年九月高岳町杉山彌三郎氏は東京方面より移入し來れる燐寸を見て感ずるところあり、戸長の職を退

き醫師麻生頼三郎氏に就き發火藥調劑の法を傳習し、自ら苦心考案して軸木及び小箱を製造し、末廣町今井庄七氏を資本主となし十三年七月石町麻生彌三郎氏方にて眞燐社と稱する一社を起し、燐寸の製造を開始し、同年十二月工場を筒井町に移す。次で十四年加藤某仲の町に軸木の製造を始め、長坂多門氏亦神戸より職工を聘して下堀川町に燐寸社を創立し、十五年淺井重平氏傳馬町中島宗兵衛氏の後援を得て仲の町に新榮社を起し専ら内國向安全燐寸の製造に着手す。然れども創始の際とて往々藥品の配合を誤り發火せざるものあり、一時世人の信用を失墜し其の取引を謝絶せられ、破産又は廢業の餘儀なきに至りしもの多かりしが、眞燐社のみは杉山彌三郎氏の努力に依り漸次隆盛に赴き、十七年より輸出燐寸の製造に着手し、十八年九名の同業者と共に同業組合を組織し、二十五年獨逸より軸木並に列用機械を輸入し、奮闘努力斯業の發展に盡瘁したるも、關西方面の製造に壓倒せられ、輸出を斷念して暫時内地向製品の製造のみに踴躍するの止むなきに至れり。然れども尙相當多額の製産あり、大正十年に於ては數量三萬四千三百二十餘打、八十六萬七千餘圓に達したり。

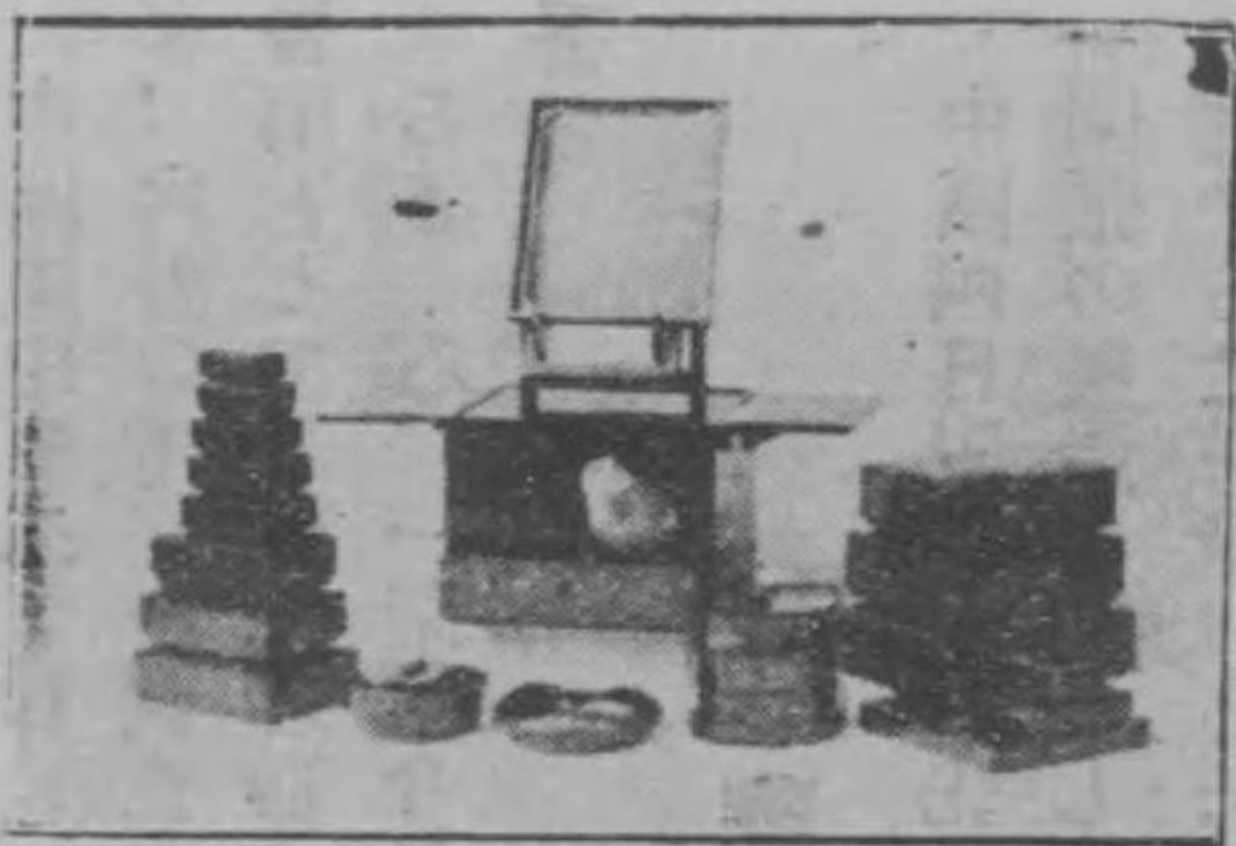


### 福田燐寸合資會社

西區櫻木町三丁目に在り。明治十五年福田源造の名を以て海部郡葛目寺村に燐寸製造業を開始す。後西春日井郡新川町に工場を移し、爾來發展して現在の場所に本工場を新設し、従来の工場を分工場とす。組織を大正七年十月合資會社に改め専ら優良品の製出に意を注ぎ、今や傘印及び大佛印は燐寸界の權威たり。電話本局六五二九番

### 三一、一閑張

一閑張は京都一閑の創始に係り、初は木地の上に紙を張り之に漆を塗れるものなりき。全部紙を以て張り抜き木地を用ひざる製法の發明せられしは近年のことにして或は謂ふ、下茶屋町安福竹次郎と稱し佛壇の箔置を業とせる者、明治九年の頃試に張抜玩具を作り之に箔を置きて店頭に陳列したるに忽にして賣盡したるを以て其の法を用ひて種々の器具を製造したるに始まると。蓋し商品として認め



黒田忠讓商店

らるゝに至りしは明治初年にして、油桶屋、建松金之助氏、黒田忠讓氏等相前後して斯業に携はり、種々の製品に應用し、又大に改良するところありしが、收支償はず他の二店は廢業し黒田忠讓氏のみ營業を繼續し製品の改良と進歩とに留意し、明治二十六年袋町黒田茂助氏が市俄古府閣龍萬國博覽會に出品以來聲價漸く國際的に揚り今や本市特産品として同業者十一、年産額八十餘萬圓に上るに至れり。製品の種類は多々あれど土産物としては文箱、葉書入、筆入、琴爪入など宜しかるべし。

中區鐵砲町に在り。一閑張商として最も古し。夙に製品の改良に努め歐米に於ける需用を考査し意匠の斬新を圖つて外人の嗜好に投じ、十數年來同品の輸出に従事す。又多年發明に苦心し一閑張を應用して考案せるもの尠からず。就中ステ



ツキ式洋傘、手提鞆、ランプセード、無針紙綴器等名高く、一閑張と共に逐年需用激増す。

### 成田久助商店

中區鐵砲町二丁目に在り。元治元年創業の老舗にして常に製品の改良に意を注ぎ、内外の嗜好を調査し専心販路の擴張に努力せり。今や一閑張は記念品或は廣告用として各種の容器に利用せられ、其の精巧と優美とは汎く人の愛玩して措かざるところ、一閑張今日の發達は一に同店努力の賜と稱すべし。電話本局九三六番

-(60)-

### 伊藤元商店

中區西日置町字出先に在り。今を去る二十年前西區傳馬町に於て創業——爾來一閑張の製造に従事し來れるが、店舗狹隘にして且つ擴張の餘地なく多數の注文に應ずること能はざるより、終に五年前現在の場所に移轉し、規模其の他を擴張

し、今や殺倒せる多額の注文にも應じ得るに至れり。電話本局七〇八番、振替名古屋四一二九番

### 三二一、味噌、溜、醬油

味噌、溜の醸造は慶長十五年名古屋普請に際し多數人夫の食料に供せんが爲めに始められ、後城中に於て醸造し之を軍用に供したり。其の製法の民間に傳はりたる年代は詳ならずと雖も、斯業の舊家と稱するものは大低承應以後に起りたるものゝ如し。而して其の製法味噌は大豆を蒸して之に鹽を加へ、樽に詰め置くものにして、其の濃液の溜れるを溜となす。享保以後にありては斯業を營む者漸く増加するに至り、寛政六年酒株に倣ひて味噌屋の株を定めたり。又冥加金五拾兩と出火の際運水組溜桶持人足とを出すの義務を負はしめ、若し之を出さざる時は過料一貫文に處せり。天保十三年に至り株式を解きしも弘化四年又再興せられ十ヶ年を限り冥加金として正金五十兩米札五十兩づつを上納せしが、安政四年十一月正金五十兩の外に米札高を半減して十二兩二分にせんことを請願せり。又他

-(61)-



國より移入の味噌、溜には代金一兩に付銀一匁づゝの運上銀を上納する事他の商品と同じく、當時市内に焚味噌屋七十八戸あり、何れも株を所持し猥りに製造を許さず、錢屋喜兵衛、永樂屋傳右衛門、井桁屋久助、山本屋甚九郎、焚味噌屋總代となつて同業者を取締り。而して從來卸小賣の値段區々にして不正の商業を營むものあるを以て、安政元年品を上中下の三種に分ち各賣價を一定し、北山屋吉兵衛、白木屋善左衛門、三河屋庄助等をして小賣屋世話方となし、以て需用者の便利を圖れり。

醤油も亦早くより醸造せられしが、味噌溜の如く盛ならず、三河地方を始め諸國より移入せらるゝもの多く、文化十四年頃より入津の品に對して運上を取立てて之を上納せり。其の規定味噌、溜に同じく嘉永の頃に至りては入津最も盛にして自然不規律に流れしを以て安政元年再び入津の醤油取締をなし、焚味噌屋總代藤屋新左衛門宅に仲買人毎日一人宛出張して入津の品数を改め運上銀を上納することゝなせり。維新の後醤油の需用大に起り、他國より移入せらるゝもの多く、従つて味噌、溜專業者に影響するに至りしを以て、明治五年以來醤油醸造をも兼

業とする者多くなれり。爾來年々品質の改良と共に産額を増加し、三十三年名古屋味噌溜醤油製造同業組合を組織し大に販路の擴張を圖る。産額大正十年に於て四萬一千二百二十七石、百七十八萬八千二百二十四圓に上る

#### 名古屋味噌溜株式会社

東區千種町塚越三ノ八に在り。資本金一百万圓、内拂込濟五十五萬圓にして、大正八年十二月、合名會社佐野屋、堀田合資會社、神谷傳右衛門、渡邊喜兵衛、合名會社吹原味噌店、梅村鐵次郎氏の營業を併合繼承して創立せられ九年七月近藤武兵衛氏の營業をも併合す。従つて工場萱屋町、相生町、宮町、上長者町等七ヶ所に散在し一ヶ年仕込石數一萬二千石、製品生引溜四千五百石、味噌六十萬貫に達し、販路縣下及び岐阜、静岡、長野、東京、大阪、京都、奈良、兵庫、滋賀三重に及ぶ。現重役は社長渡邊喜兵衛、常務取締役梅村鐵次郎、取締役中村轍太郎、吹原九郎三郎、監査役神谷傳右衛門、堀田清右衛門、近藤武兵衛の七氏なり  
電話東一三六六番



「蜂印」醸造元

登録商標

蜂須賀光次郎

店舗東區中市場町に在り。文久元年の創業に係り、市内有数の老舗たり。同店の製品は今や斯界の權威として世既に定評あり。當主は現在名古屋味噌溜製造同業組合の組長に擧げられ同業を代表す。商店用電話東三二〇一番、振替名古屋七三九番、別宅電話東一七四四番

味噌溜醸造業



森本金十郎商店

西區堀詰町に販賣場を、中區露橋町柳原に一大製造工場を有す。安政四年の創業にして、市内有数の醸造家なり。特製品黄金印味噌、溜の名世に高し。先代鐵三郎氏は第一回の同業組長にして當主亦現在副組長たり。販賣場電話本局一一八八番、製造場本局一七三二番、振替名古屋三五六三番、東京八五九〇番

三三二、清

酢

酢は袋町笹屋傳左衛門氏の醸造せるもの古くより名あり、初め春日井郡樂田村に於て製酢業を営みしが、其の頃より丸勘印の清酢は全國に聲價を博し、後本市に移り愈々事業を擴張し、明治十八年商標を登録して専ら純良の製品を出せり。造石高年約二萬石に達す。

合名會社笹田商店

西區袋町二丁目に在り。創業以來三百有餘年の歴史を有し、其の製品丸勘印清酢は品質精良香味醇美にして調理用に適し、夙に斯界に定評あり。支店を攝州灘に有し、發賣元を東京小網町村上商店及び蠣殻町升本喜三郎商店とす。電話本局二七五番

三四、清

酒

名古屋開府の際清州より移りて酒造を業とせる者は僅々二三に過ぎざりしが、藩主徳川光友南都の酒を好み、奈良より杜氏を招きて醸造せしめしより忽ち城下



に傳はり、年を逐ふて漸次盛となれり。元祿の頃長者町和泉屋、傳馬町笹屋、釜屋、田島屋、京町福徳屋等は既に名ある酒造家として知られ、酒の種類も古酒、新酒、諸白、次酒、中汲、焼酎、味淋、白酒等あり、元祿十四年に於ては尾州領内の酒造高十一萬四千九百六十石に達す。又此の頃より酒株の制を設け町方と在方とを區別し之を有せざれば醸造することを得ざらしめ、凶作の年にありては酒造の高を制限し、其の所持の株に對して二分造或は三分造を命じ、或は新米を以て醸造するを禁じ、密造する者を嚴罰に處するの制を設けたり。然れども酒造家及び造石高次第に増加し、寛保の交には名古屋酒の稱漸く世に高く、且つ他國の酒は絶對に移入を禁じたれば、市内の需要多く寛政四年酒六萬兩の産額中他國へ移出せられたるは僅々三分餘に過ぎず、天保、弘化、嘉永の頃に至つては斯業最も隆昌を極め、同業者百五十戸に及べり。従つて其の検査も嚴重を極め年々造石高に對して使用すべき桶を制限し、不用の分は封印を施して町代に預け置かしめ又市内に失火あれば一戸一人つつの水の手人足を出し之を怠りたるものは過料に處せり。

然るに安政の頃より斯業漸く衰微し、加ふるに維新後他國品の密移入盛に行はれ、藩廳之を防がんとして酒會所を設け酒造家を毎日交替出張せしめて密輸入を監視せしめられたれども、時勢の向ふところ奈何ともする能はず、會所も之を閉鎖するの餘儀なきに至るや、傳馬町山本九郎氏率先して移入酒のみを販賣したれば市内の酒造家は茲に大打撃を蒙り、同業者結束して極力移入酒に拮抗し、針屋町に會所を設け名古屋酒の販路擴張を圖りしも逐年ならずして閉鎖の止むを得ざるに至り、明治四年十月酒株廢止せられ爲に倒産するものさへ生じ、往時盛なりし醸造家も僅に七十戸に減じ、十四年には五十二戸となり、造石高も一萬五千二十六石餘となり、其の後著しき發達を見ず、大正十年に於ては一萬七千八百餘石、百六十三萬六千五百七十餘圓の産額あり。

#### 清酒菊世 廣瀬合名會社

創業は明治六年なり。原料の粹、産額の大、技師の英、職工の精に、權威の成  
品は驚異を以て世に歡迎せられ夙に定評あり。同社の三大工場は南區本星崎町、



電話鳴海三番、南區呼續町、電話南區二六〇四番、及び碧海郡刈谷町、電話刈谷四番、に在り。而して發賣所は中區納屋町一丁目廣瀬合名會社支店なり。電話本局三二七九七番、六三六八番

### 美濃重商店

彌宜町の美濃重商店と云へば、清酒「青皇」の蔵元として其の名斯界に高く信用厚き老舗たり。製品は優等芳醇、今や中京に於ける銘酒なりとの評江湖に喧傳さるゝに至る。文化二年の創業にして初め酒類の販賣を業としたるが、明治十七年より清酒の醸造を開始す。販路頗る廣く且つ鞏固なり、電話本局一四〇五番、店主伊藤重兵衛氏

### 三五、菓子

名古屋に於ける所謂菓子の製造は甚だ盛にして、殊に新道町の如き製造家町内に櫛比し、藪下、明道、押切の各町亦いづれも一部落を成して製造に従事す。

其のよく今日あるに至りし由來は詳ならざるも、實曆の頃長門の人醫師永富獨嘯庵尾張に來り住し、砂糖の製法を傳へたるが、其の頃より押切町に四五の駄菓子屋あり、煎餅、粗等を製造して賣出し、次第に發展して現時の盛況に達せりと云ふ。現今製造額頗る巨額に上り、種類和洋共千差萬別、市内は勿論普く全國各地の需要を充たし、遠く朝鮮、滿洲に及び、産額二百六十五萬餘圓に上る。

### 日出軒合資會社

中區榮町三丁目に在り。明治十八年故富田義忠氏の創始に懸り、店運隆々として年と共に發展し、明治四十三年七月組織を改めて合資會社となし以て今日に及び。和洋各種の菓子を製造販賣し、製品の優良なるは周く世間の知る所にして斯界の重鎮たり。殊に洋菓子は他に比肩する者なく、其の社名は當市洋菓子の代名詞たるの感あり。之一に故店主の卓見によるものにして實に明治二十年早くも其の製造に着手し、大いに江湖に好評を博したるに起因せり。爾來苦心慘愴、品質の精選と製法の改善とに努力し、今や好箇の名古屋土産として名聲噴々たり。



因に榮町發展會場内に同社喫茶屋の設あり。代表社員横井錠三郎。電話園東一四二〇番、振替口座東京九四七六番

### 三共製菓株式會社

西區櫻木町四丁目に在り。大正七年八月の創立にて洋菓子、ビスケット、掛物ドロップス等を製出し、年産一千萬封度に達す。工場の完備と製産の多量とは當地斯界の霸王たり。全國樞要の地に特約店を有し常に製品の改良に意を注ぎ高等品ビスケット「ナイレット」の如きは好評噴々たり。電話本局七四五二番、社長池山銀治郎氏

### 敷島製パン株式會社

本社を東區長辨町に有し、市内目貫の場所に直賣店並特約店數十ヶ所を有す。大正九年六月の創業にかゝり、銳意製品の改良と販路の擴張を計りたる結果、シキシマパンの名は今やパンの代名詞たるの觀を呈し、名古屋食料品界に覇を稱ふ

最近上前津の一角に直賣店並試食堂を新設し、市内の人氣を集中す。名古屋名物の一たり。

### 龜末廣菓舖

明治三十三年西區傳馬町六丁目に製造販賣を開始し、爾來江湖の嗜好に投じ日と共に發展し、大正二年富澤町に出張店を設け名聲噴々龜末の菓子てふ話は上菓子の代名詞たる觀あり、意匠の斬新と原料の撰擇と技術の巧妙とは他の模倣を許さず。商品券發行高の多きは同店の信用を證明す。電話東五〇七七番、振替名古屋三五七番、店主吉田太一郎氏

### 二六、飴

近年飴は砂糖に比して安價なる爲め、菓子の原料として次第に多く用ひられ、前途尙一層需要の増加すべき理由あり。茲に於て乎機械を用ひ工場工業として大規模に製造せんとする者現はるゝに至り、即ち明治四十三年十二月平子徳右衛門



加藤平兵衛、大島喜十郎氏等發起となり、資本金十萬圓の名古屋製飴株式会社を熱田東町に設立するあり、大正九年五月尾張製飴株式会社を創立せらるゝあり、年と共に當市製飴界は長足の進歩をなし、前途益々發達の趨勢に在り。

#### 名古屋製飴株式会社

明治四十三年の創立に懸り、當時資本金十萬圓なりしが、爾來社運の隆昌に伴ひ大正七年及び同九年増資をなし總額五十萬圓に達せり。其製品雪印月印の如きは斯界に最も好評あり。販路は今や内地一圓は元より北海道方面に及び當市重要物産の一たるを失はず。社長平子徳右衛門氏、電話南一〇二三番、一〇二四番、振替東京二四八二一番、大阪一一二一番、名古屋六三三番

#### 尾張製飴株式会社

大正九年五月の創立に懸り、中區西日置町出先に在り。代表社員は鈴木健氏にして、田面芳太郎氏主として經營の任に當り、水飴製造を以て名聲高し。販路は

當市内は固より東海、北陸、長野、伊勢地方をその尤なるものとし、近來社運の著しく隆昌に向ひたると共に益々擴張しつつあり、電話南本局六七七六番、振替口座名古屋五五二八番

#### 三七、製粉

明治三十七八年戰役後に於ける各地製粉事業の勃興は頗る顯著なるものありしも、當時當市は一消費地として僅かに地廻小麥を原料として能力一百パーレル日産麥粉四百袋を製造する株式会社名古屋製粉所あるのみにして、市内の全需要を充たす能はず、多くは東西兩市場より移入し、若しくは海外輸入粉を以て供給し其の後逐年需要増加一途の市場に相應じ來りしも、大正三年關東に主力を有する日清製粉株式会社は率先當市將來の發展に着目して、獨逸式機能力五百パーレルの分工場を新設するに至れり。爾來世運の進展と文化の發達は旺盛なる製粉の需要を來たし、又逐年海外原料小麥の輸入容易なるの事情は併せて地の利を得、即ち日清製粉株式会社の大正七年米國機能力五百パーレルの増設となり、名古屋



製粉所亦同十年五百バレルを増加し、同十一年には日清製粉會社亦々一躍七百バレルの米國機を増置して東西市場を壓するの勢力を呈するに至れり。實に總能力二千三百五十バレル、日産麥粉一萬袋にして中部地方有一の生産地として附近は云ふに及ばず遠く北陸地方より關西市場に迄販路を有し、月印カメラヤ印雪印(日清製粉製品)青鶴印赤鶴印(名古屋製粉製品)等地盤牢固として抜く可からざる地歩を占むるに至れり。

#### 日清製粉株式會社名古屋支店

支店は西區傳馬町二丁目、工場は同區則武町に在り。大正三年の建設に係り、當時能力五百バレルなりしも、爾來需要の増加に伴ひ増設して今や日産六千八百袋一千七百バレルとなれり。機械は米國式獨逸式を併用し電動力を以てす。小麥は内外國産を用ひ、其の製品は中部並に近畿地方に販賣す。カメラヤ印、銀杏印、月印、雪印等一般に歡迎さる。由來日清製粉株式會社は明治四十年東京に本社を設置して以來孜々として經營を怠らず、現在資本金四百六十八萬圓、左記

支店工場を有する本邦首位の製粉業經營者たるに至れり。現在日産能力麥粉三萬五千袋、鶴見工場竣工の上は實に五萬袋を算す。

支店 名古屋、神戸 工場 岡山、水戸、高崎、宇都宮、佐野、館林、横濱、鶴見

#### 名古屋製粉株式會社

明治三十八年十月の創業にして、米國式百バレル製粉機を据付け、東海唯一の重鎮として斯界に囑目せられしが、時代の趨勢に従ひ需要は逐年増加し、爲に顧客の意を滿たす能はざるに至り、大正十年八月米國最新式五百バレル製粉機を増設して今年産額一百万袋に及び、東西市場に發展を計り居れり。

#### 三八、漬物

漬物は本市名産の一にして、近郊一帶蔬菜の栽培に適し産額豊富にして、古來守口漬及び御器所の澤庵の外、宮重大根、青瓜等の味淋粕漬等有名なり。年産額



三十四萬五千餘圓に達し、一種言ふべからざる其の味は東西人士の深く好むところ、之を食膳に缺くは恰も月を邀へずして獨酌相親しむなきに似たり。

ひし雪漬物店 淺井藤七

中區新柳町五丁目に在り。明治二年より三河岡崎にて味淋漬製造業を営みしが二十三年當市に移り製品の改良に努むると共に八丁味噌及び罐詰を初め各種食品の販賣をも開始し、爾來店運益隆昌に製品の販路愈廣く好評噴々たり。畏くも今上先帝兩陛下を初め皇室の御買上の光榮に浴せし事數回。電話本局八七八番、振替口座名古屋二九番

① 成田友次郎

中區廣路町石佛に在り。明治十八年澤庵製造販賣業を始め、爾來品質の改良販路の擴張に努力し、今や尾張澤庵の代表的生産者として斯界に活躍しつつあり。

三九、罐詰

名古屋に於る罐詰の製造は、明治三十五年我が國特産の真鰯を油漬罐詰となし海外に輸出せんが爲め山田才吉氏等同志を募り、資本金二十萬圓を以て日本罐詰合資會社を設立し、本店を榮町に工場を知多郡豊濱町に置き、之が製造に着手せるを以て嚆矢となす。其の後同社は發展して資本金五十萬圓の株式會社となり、日露戰役當時には水産局監督下に軍用罐詰を製造し、後本社を東築地に移し盛に優良品を出すに至り、三十九年伊太利ミランに於ける萬國博覽會に鰯の味付を出品して金牌を得たるを始めとし、各地の博覽會、共進會等に於て受賞せること多かりしが終に解散し、現今に於ては主として當市の名物たる漬物類の罐詰多く、福神漬、朝日漬等著名なり。

名古屋漬物製造合名會社

西區西菊井町二丁目に在り。漬物業界の權威として夙に定評あり。從來代表社



員米倉德次郎氏が祖先よりの繼業として個人經營に懸りしを大正七年合名會社と成し、二百餘坪の原料漬物場と二百有餘坪の製造工場とを有し、新式なる機械を備へ代表者自ら熱心に多數の従業者を督し親切に製造し、其の販路に就ては内地に限られしを慨し、十數年前輸出を試み奮闘努力今や布哇、北米各州、南洋、北滿、南清等にまで製品を出すに至れり。我が版圖内は樺太より臺灣に至る各地の需要を充しつゝあるは言を俟たず。其の製品種目は錦漬、朝日漬、日本漬、菊井漬、辛子漬、名古屋漬、福神漬、其他粕漬等にして大小の樽詰並に罐詰あり。電話本局三一七七番、振替名古屋九三〇番、代表社員米倉德次郎氏。

#### 下 合名會社中村鎌吉商店

市外西枇杷島町に在り。創業以來年を閲すること既に三十有餘、孜々として業に従ひ、日夜製法の改善に意を用る、今や枇杷島驛前、知多郡横須賀町及び西春日井郡新川町に大規模の工場を設け、あらゆる漬物類並びにそれ等の罐詰を製造し、斯業界の重鎮たり。而して又一面青果物問屋としても廣く其の名を知らる。

製品の販賣日と共に擴張し、我が版圖内その製品を見ざるの地なく、遠く支那大連市伏見臺にまで支店を有し、滿洲市場が其の製品の取引を見るに至れり。尙最近枇杷島驛前に枇杷島倉庫合名會社を創立し、當業者金融の便を計る等當地名産の發展に資する所甚だ大なり。電話本局二一九七番、振替口座名古屋三〇一番

#### 四〇、製材

本市に於ける最初の製材木工業は、明治二十年五月西區上畠町淺野吉次郎氏がセメント樽の製造に着手せるに始り、越て二十三年四月同氏の手依つて發明製作せられたる堅鋸機械に依りて製材業隆盛の基礎を築けり。當時我國製材事業の微々として振はざりしは偏に製材機械の不備に基きしが、前記淺野氏の發明あるや一般當業者汎く其の恩惠を蒙り、以て製材界今日の隆盛あるに至れり。

爾來製材を業とせる者漸増し、明治二十五年南區千年淺井富次郎氏開業し、次で同二十七年愛知挽木株式會社中區水主町に創設せられ、機械力に依り盛に製材に従事せり。是現今の山岸製材株式會社の前身にして、同三十六年頃より製函に



從事せる者次第に増加し、日露戦役及び歐洲戰亂當時に至つて需要益々旺盛に向ひ、製品遠く歐米を始め南洋各地に輸出せらるゝに至れり。斯くて當業者は製品の改良並に統一を圖る爲め從來在りし製材組合を大正八年九月改めて材木商工組合に加入せしめ、以て所期の目的を達せんとしつゝあり。目下組合加入の製材製函業者百餘名にして使用職工二千名、電力使用數五、五〇〇馬力に上り、使用の機械數七百餘臺にして、大正十一年度の産額内地外國向を合せて八百萬個、價格八百萬圓に上り、本邦に於ける製材製函業を左右するの實力を有せり。

#### 淺井製材株式會社

南區千年熱田海岸に在り。明治二十年の創業にして、同四十二年合資會社と爲し、大正十年株式會社と爲す。從來茶箱、護謨箱、ビール箱及び石油箱、煙草箱荷造用箱を始め各種製函類の製造に主力を注ぎつゝありしが、最近賃挽部を新設し一般の製材をもなすに至り、賃金の低廉と運輸設備の完全とを以て同業者間に優勝の地位を占めつゝあり。製品は多く南洋、上海、海峽殖民地、印度方面に輸

出せられ、内地としては關西方面に於て賣行盛なり。尙同社は九州小倉、市内則武、車町、知多郡半田町及び兵庫縣神崎町に支店出張所を有し、日本陶器、日本磚子の兩社及びカプトビール、キリンビール用の荷造用箱一切を特約提供す。資本金五十萬圓、電話南一一二二番

#### 合名會社 加周商店

南區西古渡町中島に在り。新進の製材工場にして、大正三年開業し、同十二年組織を改めて合名會社となす。同店は製材工場として堀川筋の好位置に在り。工場敷地三千坪を占め、堀川より直接構内に入る設備あり。英國製蒸汽機關を以て自家用電氣を起し、二百五十馬力を使用し帶鋸六呎及び五呎各一臺、豎鋸六臺、丸鋸十臺を運轉し、製材のみにも年産額十萬石以上に達す。營業は製材に重きを置き傍ら製函賃挽等をも爲し、販路九州、關西、北陸の順序にて全國に亙る。今や注文増加の爲め第二工場の増設を計畫中にて近々之が竣工を見る可し。電話南局四〇八番、代表者加藤庄治郎氏



### 合資會社 白松製材所

南區千年海岸に在り。大正十年新宮商行名古屋工場を買収し、設備を改善し、百五十馬力の蒸汽機關を以て六呎帶鋸一臺、堅鋸五臺、丸鋸及製函用小丸鋸十三臺を運轉し、年六萬餘石の製材能力を有し、賃挽本位にて建築材製板製函を營む而して海陸運輸の便と優秀なる製品を極めて迅速に製材するを當工場の特徴とす。電話南一七三二番、代表者齋藤國太郎氏

### 山岸製材株式會社

本社を中區水主町に、分工場を南區西古渡町に設け、茶箱、ゴム箱、石油箱等を製造し、印度、南洋方面に輸出し、又内地向一般荷造箱及建築用材の製造販賣をなす。即ち同社は輸出箱の開拓者にして、其製品の優秀期限の確實等は海外に異常の信用を博しつゝあり。資本金壹百萬圓、一ヶ年生産高茶箱一百五十萬組以上、電話本局三六八、四七三番

### 四一、ベニヤ

名古屋に於けるベニヤの沿革は合名會社淺野木工場の沿革に異らず、即ち淺野吉次郎氏は明治四十年の交、製材製函の業務を擴張すると同時に、原料たる木材の供給奈何を顧慮し、之が調査を試みたるころ、社會上經濟上從來無用とせられたる雜木利用の最も緊要なるを認め、爾來幾多の勞苦辛酸を嘗めて之が利用の研究に没頭し、漸く二ヶ年の星霜を経て遂に合板の製造に成功し、茲に初めて雜木利用の途を拓けり。而して合板の製造には數種の機械と藥品とを要し、淺野氏皆之を發明す。即ち木材を横剝するには剝取機械を、剝取れる薄板を密着せしむるには糊及び糊附機械を、其の他完全なる合板とする迄には尙幾多の機械を必要とす。明治四十三年二月淺野式合板の名を以て專賣特許權を得、之を利用して茶函組板を製造し歐米を始め濠洲、印度、南洋諸島に輸出し大に好評を博し、又一方家具並に建築用の襖戸、天井、床板等に應用し、需要日と共に増加し、今や東京特産品の一として外來者の視察する者甚だ多し。



### 合名會社 淺野木工場

西區上島町に在り。創業茲に百五十年、事業年毎に發展し工場を増設し諸機械を完備し好成績を擧げて今日の盛運を見るに至る。同社製造の特許アサノ板及アサノ函は世界に誇るべき優良無比の國産加工板として洽く内外に賞讃を博せり。同社が米國桑港大博覽會を始め東京大博覽會等に於て名譽賞牌を受領し、又社長淺野吉次郎氏が機械の應用と合板の發明とに因り綠綬褒章を拜受せるに徴しても其の眞價を知るに足るべし。而して今や時運展開し、建築に家具に車輛に船舶に飛行機にベニアの需要次第に増加し、アサノ板の有する獨特の巧緻と聲價とは愈同社の前途をして光輝あらしむるに似たり。一ヶ年の製産能力樽及び函類百八十八萬個合板一千萬平方尺

### 新田ベニヤ製造所

名古屋驛前に在り。和洋建築用ベニヤ板を製造販賣す。大正八年の創業に係り

十勝に三萬五千餘町歩の山林を有し、豊富なる良材を以て歐米最新式の機械を應用し一ヶ年一千萬平方尺の製品を産す、ベニアの生命たる耐水性膠着劑は專賣特許にして新田式ベニヤ板の眞價は内外に宣揚せられ到る處好評を博しつゝあり。電話本局三八〇番

### 四二、扇子

寶曆年間京都の人井上勘造、其の子長平と共に名古屋に來り住し扇子製造を業とせしが、長平の子佐吉、早川半左衛門、淺野鐵藏等と共に一種趣を異にせる扇を製出せり。是れ恐らく名古屋扇の濫觴なるべく、蓋し唐扇、琉球扇、又は長崎扇と稱したる支那製扇の變形にして來朝韓人の傳ふるところなりと云ふ。三十本乃至四十本の骨より成り、要に紐を通し之を開けば半圓形となり、外觀甚だ奇なるところより大に世人の嗜好に適ひ、嘉永年間にありては特に關東地方に好評を得たりと、後唐扇の需要減退し、京扇の流行盛となるや、忽ち類似の扇を製出し廉價を以て販賣せり。尙此の外天保年間に於ては桶町植木屋半左衛門、本町大黒



屋源兵衛、吳服町玉屋半兵衛等扇子業に従事し相當苦心するところありしと。貿易品に付ては明治三年石町梅屋佐平なる者、唐扇に士農工商の様を畫き見本を携へて横濱に赴き、伊太利人に見せたるころ大に珍重とせられ直に多數の注文を受けたるが、製造能力之に伴はず信用を求め得ずして失敗せるを嚆矢とし、後數年を経て駿河町松尾宗兵衛、末廣町服部仙助、門前町田中義平氏を始め、押切町磯野清太郎、大橋卯三郎、山田徳次郎、橋本久七、前田源兵衛、吉川安次郎氏等之が輸出に努力し明治十二、三年の頃より米國輸出の途開け、漸次歐洲方面へも輸出せらるゝに至り、現今輸出向扇子として木骨のもの産額最も多く、仕向地としては伊太利其の第一を占む。年産額約三十萬圓あり。

#### 加納扇子店

西區上園町四丁目に在り。明治三十四年八月初めて輸出向扇子業を開業し、神戸、横濱より間接に注文を受けて輸出をなし漸次發展するところありしが、更に農商務省の紹介に依り南米アルゼンチン方面との取引を開始し、益々扇子の輸出

に精勵する一方又四十年より内地向扇子の製造に着手し、各地銀行會社等の注文を一手に引受け、製品の優秀を以て同業者中に覇を争ふに至る。尙昨年九月愛知縣商品陳列所に單獨扇面意匠展覽會を開き、其の進歩の迅速なると前途の洋々たることを示し人をして悉く感奮せしめたり。電話本局三二三七番、店主加納襲賢氏

#### 中村扇子店

西區菊井町三丁目に在り。明治三十年上園町に於て創業し、最初より貿易物に其主力を注ぎ、製品の改良と販路の擴張とに努めつゝありしが、其の後益々發展し、同四十年に至つて現在の菊井町に移轉し今日に及ぶ。主として輸出せらるゝは米、英、伊の各國にして年々注文増加の盛況にあり。電話本局二一〇六番、店主中村源藏氏

#### 水野商事株式會社

明治初年より水野彦吉の經營し來れる事業を現在の組織に改めたるものにして



明治三十三年以來シムガミシン會社の廣告扇百五十萬本の注文を受け、日露戰役の際軍扇六十五萬本を僅々六十五日間に製造納入せる等、同社の信用は牢として内外に抜くべからず、製品の優秀價格の低廉等は前途益々信用を高むると同時に繁榮の一路に向はしむるものなり。

### 四三、提 灯

慶長年間藩主徳川義直禁裏御所より涼燈を賜はりしが、熱田の神職某之を模造して御所提灯と稱せりと云ふ。現今にては裝飾用或は實用向等各種の提灯製造せられ販路内地は勿論歐米諸國へも擴張せられ、本市重要物産の一となれり。貿易向の提灯は比較的廉價にして一種獨得の風致を備ふ。産額大正十年に於て二十二萬餘圓に上る。

#### 中善合資會社

中區流川町に在り。明治初年市内橋町に於て開業し、爾來専ら製品の改良、販

路の擴張に留意しつゝありしが、得意先の増加と共に同三十九年合資會社に組織を變更し、超えて大正三年に現在の場所に移轉す。各地博覽會等に出品し有功賞牌を受けたること數度、販路内地は勿論米國方面に及び、今や提灯の製造兼卸商として斯界の第一人者たり。電話南三八四番

#### 中村合名會社

西區上園町に在り。代々斯業に従ひ創業以來百餘年を経過す。明治初年迄は内地向のみを取扱ひしが、同二十年頃より貿易物に手を染め以て内外の需用に應ずるに至る。三十八年業務を擴張し會社組織となす。現今貿易物に重きを置き販路を英米及び南洋方面と東京、東北、京都方面に有す。電話本局二八九八番、代表者中村源藏氏

#### 小柳商店

中區西新町二丁目に在り。大正元年創業以來銳意製品の改良並に販路の擴張に



努め、今や技術の進歩生産組織の完備とを以て本場たりし岐阜を凌駕し、名古屋物産として海外に迄聲價を博す。販路内地一圓は勿論、海外輸出高數百萬に達し宮内省御買上の光榮を擔ふ。電話東四一一一番、店主小柳安太郎氏

#### 四四、人力車

人力車は明治五六年の交、關鍛冶町堀田吉兵衛、岩津甚助等に依つて製造を開始せられ、十三年の頃東片端町國枝鐵吉之を始め南桑名町早川松次郎氏又製造を開始す。而して自動車、自轉車其の他の交通機關の發達著しきものあるにも拘らず、依然として人力車は交通上重要な位置を占め、且つ護謨タイヤの使用其の他の改良に因て益々乗心地の快適さを増し、都鄙いづれにも用ゐられざるなし内地各地は言ふに及ばず、朝鮮、支那、南洋方面へも相當多額の輸出あり。産額十餘萬圓に上る。

#### 林製車場

中區南桑名町に在り。明治四十三年の創業にして店主は舊來の木輪人力車の不完全なるに鑑み、米國より金屬車輪を輸入し之に研究を重ねて改良を施し、終に人力車用の車輪として完全なる製品を製出せり。今や支店を福岡、小倉に有し、販路を内地、支那、南洋、新嘉坡に擴張し、製造輸出をなせり。電話本局三九三七番。店主林愛治氏

#### 四五、籐製品

明治初年の頃、既に籐筵、菜籠等籐製品の製造を業とする者市内に二三ありたるが、其の製出盛ならざりしは多言の要なかるべく、當市の籐製品として漸く世人の耳目に値するに至りたるは、蓋し乳母車、椅子等近代的籐製品類の製造を開始して以來の事なり。而して乳母車は明治二十二年一外人が其の當時籐





筵等の製造を營業としたりし富澤町鬼頭次郎氏に對し其の製造方を依頼せしに端を開き、其の後次第に世の需要の増加すると共に同業者の數も増加し明治四十年頃には著しく盛運に向ひ、國內各地より歓迎せらるゝに至れり。然るに近時都市交通機關の完備するに伴ひ都市の需要漸く減退し、其の前途聊か樂觀を許さざるものありと雖も、田舎方面の要求漸を追ふて増し、業狀尙依然として優勢を唱ふ。又椅子は後述の如く、畑市商店の店主畑市右衛門氏が籐椅子を以て將來文化生活の必需品となすてふ洞察を下し、大正三年之れが製造に着手したるに始まり逐年需要の激増と共に製造家の増加、製産高の激増と相俟ちて前途愈多望なるものあらんとする盛況に在り。現在市内に於ける籐製品製造家百二十餘名、縣下の郡部を合すれば實に二百五十餘名、年産乳母車二萬臺、椅子一萬脚、籐筵籐表其の他各種籐製品等製産高を之れに加ふれば價額正に五十萬圓の巨額に達せんとす。

合資會社 畑市商店

明治二十四年の創業に係り、當初乳母車のみを製造したりしが、時代の進化に伴ひ各種籐製品の需要著しく喚起せらるゝに鑑み、椅子、卓子等一般籐製品をも製造するに至り、現在八十餘名の職工を使用し年額十五萬圓餘を製出す。他方廣小路中央バザー内に賣店を設け之が販賣をなし、市内は勿論廣く東西各地の需要に應じつゝあり。殊に椅子(西京丸)は大正三年市内同業者に率先して製作を試み翌四年日獨戰爭凱旋の砌西京丸上司官御召の光榮を賜りたるに因りて命名し、爾來一に製品の改善を圖り、安價に提供し來りたる結果、今や文化生活の最適品として名聲四方に傳はり、益々歓迎せらるゝ有様なり。

鬼頭次郎商店

東區富澤町二丁目

明治十七年五月より籐細工に従事し、二十二年乳母車の製造法を發明し、之れが製造販賣に着手して以來益々世の名望を得るに至り、現今乳母車を始め其の附屬品並に各種籐製品類の製造卸を專業とし、市中に於て最も信用あり、最も老舗として推奨せらるゝ蓋し故なきに非るなり。電話東二四七〇番



## 四六、自轉車

自轉車の前身が鐵製の大小二輪を前後に配列せる二輪車なりし事は、何人も周知する所なるべし。我が名古屋市に於ても、明治二十八年頃より一二之れが利用せらるゝありしが、其の後十年日露戰役頃には、最早自轉車の利用大いに普及し横濱のマツカーザー、並にアンドレスジョージ等の商社は盛に之れが輸入を開始し、傳馬町の中村自轉車商會は市内唯一の取次販賣店として知られ、クリーブラント等輸入車を以て賃貸をなすもの、或は之れが修繕を業とするもの等、市内各所に存在したりしが、進んで之れが製造をなすものに至りては未だ其の例を見ざりき。然るに明治三十八年に至り、日露の大戦漸く終末を告ぐるや、東京の宮田自轉車製作所は兵器の製作より轉じて自轉車の製作を開始し、當地前田商會を以て關西方面に於ける唯一の一手販賣所と指定せり。而も當時既に自轉車用各部分品の製造に關しては、市内隨所に行はるゝ有様なりき。現在御器所町に一大工場を設置し、本邦二大製作所として前記宮田製作所と東西拮抗して宮田が實用車の

製作を目的とするに反し、更に一步を進めて體裁を考慮し、優良車の製作を事とする岡本自轉車自動車製作所は明治三十三年創立以來、古渡に在りてハンドルの製作に従事したるが、其の後岡本松造氏、大阪の角利吉氏と共に歐米に遊び、歸來之れが完成車の製造を企畫し始め米國式に規りしが次第に英國式に移りて只管我國の道路に適せん事に努め、以て今日の盛大を致すの端を開けり。今や當市に於ける自轉車製造業は、鐵工業中主要の部分となし、岡本製作所を初め兩名古屋丸八、大島、竹田等完成車の製造を目的とするもの、外、車體部分品附屬品等の製造を業とするもの七八十箇所の多數に及び、長谷川、中村、前田等は一方他の製品を取次ぐと共に、他方之等各部分品を買集めて取組み、廣く東西各市場に提供す。製産完成車實に二十萬臺、部分品の製出高を合すれば正に三千萬圓の巨額に達すべく、名古屋の製品は一般に大阪の夫れに比し優良なるは内外相認むる所にして、將來益々多望多端なるは論を俟たず。

### 株式會社岡本自轉車製作所

自轉車  
自動車製作所



東郊線圓上停留所の西南に在り。明治三十二年現に社長たる岡本松造氏の創立にかゝり、當時は渺たる一小工場に過ぎざりしが、年と共に躍進又躍進し、今や堂々たる規模の下に最近落成せる新築工場に移り、銳意將來の發展に努めつゝあり。同社の製品は社長自ら歐米諸國の著名工場を歴訪し、我が國在來の粹に其の精を採つて加へたるもの、堅牢優秀にして且つ廉價なり。而も其の構造局部の技能に就ては一種獨特の工夫を施し、容易に他の追従を許さず、同社の商標は日本輪界に於ける最高權威たるの聲價と信用とを博し、近年産額十二萬臺の理想を實現せんとしつゝあり。實に同社を有するは中京輪界の誇にして、且つ名譽とするところなり。

#### 長谷川自転車商會

自転車及部分品販賣業者中創立最も古き名古屋市西區傳馬町二合名會社長谷川自転車商會はセーフ、ハレー、ベナス號自転車の發賣元として夙に名譽を博し、創設既に二十五ヶ年を閱し、内外各種巨細に涉り常に在庫品豊富、取引確實迅速

丁寧なる一般の定評有り、從而時代に超越し隆盛を極め絶大の信用を有す。現今本邦中部地方の重鎮たり。

#### 四七、飛行機

本市に於ける飛行機の製作は東京砲兵工廠熱田兵器製造所の飛行機機體及び發動機製作に次で、大正八年六月東京砲兵工廠名古屋機器製造所の東區千種町に設置せられ、専ら飛行機用發動機の製作並に研究を開始せるに端を發し、愛知時計電機株式會社先づ民間工場として之が製作に着手し、大正九年二月愛知郡呼続町大字瑞穂の假工場を之に充つべき改造増築し、同時に技術養成の爲め技師及び職工を横須賀海軍工廠に派遣し、七月より諸般の準備を備へ機體の製作に着手し、十一月七日第一號機を完成し、十二月二日右飛行機は横須賀海軍工廠追濱飛行場に於ける試験飛行に好成績を得たり。然り而して大正十年五月三菱内燃機株式會社は名古屋港東築地なる南區大江町に廣大なる工場を新築し、同社名古屋製作所として飛行機々體及びイスパノ型發動機の製作及び修理を開始し、愛知時計電機



株式會社亦大正十一年十月熱田船方の新築工場に飛行機部を移轉し、同社事業の中心を之に置いて海軍用大型飛行機の製造をなし、今や名古屋は本邦に於ける飛行機製作界の中心地たるに至れり。

#### 愛知時計電機株式會社

南區熱田船方に在り。明治二十六年の創立にして最初は専ら掛置時計の製造に従事したるが、日露戰爭當時より兵器の製造に指を染め、後社内に時計及び電機作をも開始するに至る。此の間經濟界幾多の波瀾に遭遇し經營上苦心を要したる事少からざりしも克く之に堪へ、普通の増資二回、合併による増資三回を斷行し資本金五百萬圓、敷地東川端町、瑞穂町、船方、築地の四ヶ所を合し五萬四千九百六十餘坪、工場建坪七千餘坪、從業者、社員六十三人、職工一千三百四十四人を數へ中京屈指の大工場となる。社長鈴木惣兵衛氏、常務取締役青木鎌太郎氏、取締役兼支配人増本敏三郎氏

#### 三菱内燃機株式會社名古屋製作所

南區大江町に在り。主として飛行機々體發動機及自動車の製作修理に従事す。大正十年五月事業を開始し、常に技師を海外に派遣し、又は外國技術員を雇入れ技術の進歩を計り、其獨特の設計になる各種機體及同所が製造權を有するイスパノ型發動機の成績極めて良好にして、各方面に多大の稱讚を博し、我國飛行機製造界に獨歩の地位を有す。

#### 四八、時

#### 計

名古屋と時計とは古來因縁淺からず、初め徳川家康隱居して駿河に在りし頃、朝鮮より贈られたる時計の機械破損し、之が修繕の技工を京都に求めしに安藝の浪人にして津田助左衛門なる者あり、當時京都に住し細工に長じたるを以て之に修繕を命じたり。然るに助左衛門は右時計の修理と共に別に新に一個の時計を製造して献上し深く家康の感賞を得たり。後助左衛門は竹腰山城守に仕へて駿府に



在りしが、慶長六年松平忠吉の尾州に入るや附隨して清洲に來り、遷府と共に名古屋に來り常磐町に住して代々尾州家の御用をつとめ切米六十石十人扶持を給せらる。寛永の頃深田正室又節時計を工夫し助左衛門に作らしめ、藩主義直に獻せしことあり。名古屋が時計の製産地として今日ある決して偶然にあらず。斯くて明治維新後に於ては、十七八年の交岡崎の人中條勇次郎、本市水谷駒次郎と共に一年有餘を費して二個の掛時計を製作したる事に起り兩人は之を舶來時計の販賣業者林市兵衛に示して投資を乞ひ、市兵衛快諾して其の製造權を譲り受け、二十年四月杉の町に時盛社なる一工場を設立す。其の後齒割機械。穴明け機械。眞挽機械等各種機械の改良に幾多の資財を投じ、刻苦研究を重ねて遂に原料の輸入を仰がずして製作するを得るに至る。爾來大に販路を開拓し、二十四年松山町に工場を新築して之に移り大に製造の能力を増す。然るに此の前後數年にして同業の會社製造場市内に續出し、販路亦擴張せられ、内地は勿論支那、南洋方面にまで輸出せらるるに至る。製造の品種は掛時計、置時計、金屬置時計にして、大正十一年に於ては製造戸數二十二、製産額四十五萬八千七百餘個、價格百九十六萬七

千七百餘圓に上る。

#### 合資會社高野時計製造所

明治三十二年創立し、掛時計の製作を初めて以來、十年孜々として製品の改善を圖り、只管廉價に提供するに努めたる結果、漸く今日の盛大をなし、内地は勿論支那、關東州等外國市場に我製品旗印及鹿印を見ざるなきに至れり。更に大正二年高野金屬品製作所を増設し、金屬置時計の製造をも開始すると共に、優秀なる職工を招備し、銳意優良品の製作に努力したる爲、今や其の製品の聲價正に歐米製品より勝るとも劣らざるは、獨り本店の自認するのみならず、本邦時計界の誇稱する所となれり。市内中區三田町に本店、電話南八六五、一三四一番、を有する外、神戸市元町二丁目に出張所、電話三ノ宮一一四八番、を分設し、廣く内外の需要に應じつゝあり。

#### 明治時計製造合資會社



明治二十八年十月の創立にして年所を経る茲に約三十年、常に穩健着實を旨として經營し、歩一步基礎の鞏固と製品の信用とを高むるに努め、今や當地業界の白眉を以て目せらるゝに至る。殊に同社幹部の創業以來交迭せざると職工幹部の永年勤続者なるとは多く其の例を見ず、同社の今日在る亦偶然に非ざるを知る。年産額四十萬圓

#### 尾張時計株式會社

明治二十九年資本金四千圓の合資會社を起し、時計の製造に着手せる當社は其後次第に隆盛に赴き、三十九年株式組織に變更し、前後數回増資して資本金今や五十萬圓となる。大正九年現位置に移り、斯界の重鎮たるに至れり。年産十萬個を越え製品地球馬印は益信用を高め、内地は勿論支那、印度、南洋各方面到る處歓迎せられざるなし。

#### 四九、蠅捕器

蠅取器は尾張時計株式會社並に名古屋商事株式會社の製造する所にして、前者は之れが專賣特許權を後者は之れが實用新案權を有す。尾張時計株式會社は大正元年斯品の發明者大阪の堀江松次郎氏より專賣特許權を繼承し、翌大正二年より之れが製造を開始せるものにして、既に十餘年の閱歷經驗を有するものなり。此の間他に之れが模造品を製作するもの各地に續出する有様なりしが、多くは同社の製品と殆き選ぶ所なく、或は敗訴し、或は敗争し、現在前記名古屋商事株式會社時計部が大正十年實用新案の發録を受け之が製作に従事する外宇内全く競争者なく、最近兩者の製造高合計年十數萬個、從來の各種蠅取紙、蠅捕器に代りて廣く國內の需要に應ずる外、支那、馬來半島、印度、南洋等に輸出する額亦巨萬を數ふるものあり。

#### 尾張時計株式會社

時計の製造業者として世の信望を集めたる同社は、大正二年より新に蠅捕器の專賣特許權を繼承し、之が製造をも開始せり。蓋し斯品製造の端を開きたるもの



にして、當初より廣く内外に需要せられ製造日も足らざる盛況にあり。最近年十萬餘個を製出し、製品は等しく地球馬と稱す。堅牢無比幾多模造品の遠く及ぶ能はざるものなり。

#### 名古屋商事株式會社時計部

一般時計の製造販賣に従事する事多年、最近に至り村瀬式丸ロール蠅捕器の製造販賣をも開始せり。蠅捕器は永年努力の結果考案特許を受けたるものにして、在來の蠅捕器に存する總ての缺陷を補ひ、蠅を捕ふるに就きては頗る妙を得、毫も他の追従を許さざる特徴を有し、最も完全なりとの定評あり。

#### 五〇、製繩器

由來製繩機には巻取式及び籠取式の二種あり。初めて世に出でしは巻取式にして、佐賀縣人宮崎某が宮崎式製繩機を創製發賣せしに始まる。然るに巻取式は製品硬きに失し、使用上多少の缺點あり。此の缺點を補ふべく苦心の末發明せられ

たるを籠取式製繩機とし、巻取式の現はれたる翌明治二十九年岡山縣人原初太郎氏が名古屋に於て之を發明す。而して原初太郎氏は右製繩機の特許權を得ると共に原式籠取製繩機と名付けて製作及び販賣を物産共同會社に委託し爾來改良を加へて製品の完全を期し、販路次第に擴張せらる。現下市内に於て製繩機の製造販賣をなす者四人、産額十萬圓に達せんとす。

#### 物産共同會社

名古屋驛前に在り。明治二十九年十月以來原式籠取製繩機の製作販賣に従事し販路内地は勿論東南洋に亙り一ヶ年二萬臺以上を取扱ふ。特許の關係上原式製繩機の製造をなす者は同社のみにして、特許權の數は一機六件以上に及び髣切、仕上等自由なり。電話本局一一四六番、振替名古屋二二九番、營業部長鹽坪治雄氏

#### 五一、樂器

本市製産の樂器には琴、三味線等の所謂日本樂器の外、大正琴、金剛琴等あれ



き、就中誇るべき特産品として見るべきはヴァイオリン及びマンドリン等の西洋楽器とす。而してヴァイオリンは東門前町鈴木政吉氏の創製に係る。政吉氏は明治十八年父の業を継ぎ琴、三味線の製作に従事せしが、時勢の變遷に伴ひ前途發展の見込なきを看破し、西洋楽器たるヴァイオリンの製造に着手し、明治二十年始めて一個のヴァイオリンを製造し得たり。偶々岐阜縣師範學校に外國製のヴァイオリンの到着せるを聞き其の優劣を比較したるに舶來品の精巧優美にして音量の豊富なる自家製造の到底及ばざるところあり、更に刻苦精勵稍完全なるヴァイオリンを製作し、二十三年五月自ら携へて上京し東京音樂學校長伊澤修二氏の斡旋に依りルードルス、ヂットリツヒの試彈を得、有益なる注意と指導とを受け、更に奮勵して遂に外國品を凌駕するの製品を得るに至れり。爾來販路日に擴張せられ、幾多の辛酸を嘗めて現今使用の機械類を發明し、三十三年四月東新道町に一大工



場を設けて鈴木ヴァイオリン工場と稱し、三十九年松山町に移り更に規模を大にし、外國輸出又大に盛となる。

此の外天下に最も廣く行はるゝ大正琴及び最近發明せられたる金剛琴は、日本考案樂器聲光社の製造にかゝる。

尙此の外從來の琴、三味線の製造も相當盛にして、大正十年に於ける樂器類の産額百二十七萬四千圓に上る。

### 鈴木ヴァイオリン工場

第一工場は東區松山町、第二工場は同區石神堂町、第三工場は千種町字赤萩に在り。明治二十一年二月の創業にして鈴木政吉氏の經營に係り、生産額一ヶ年百三十餘萬圓に上る。經營者鈴木政吉氏は舊名古屋藩士正春氏の長男にして安政六年十一月を以て生れ、父業を継ぎ琴、三味線の製造に従事したるが、偶々二十年内地製ヴァイオリンを見るに及んで之が製作を試み、爾來木材の選擇、乾燥、塗料の製法、機械の發明に至る迄悉く獨創的見地より日夜研究に没頭し慘憺たる苦



心の結果今日の成功を見るに至れり。四十三年歐洲に遊び獨伊に於て斯業の洞察研究を遂げ、以來事業益發展し、大正六年八月綠綬褒賞を下賜せられたり。

### 中 惣 商 店

本店を西區袋町に、支店を新柳町に設け、本店に對し支店を南店と呼ぶ。古來和樂器は京阪地方より購入したりしが、明治初年之が製造に着手し、店主自ら音律整調の爲幾多の苦難を累ねたり。今や其の製品は内外廣く賞用せられ、店主惣太郎又能樂界並に同業者間に聲望あり。本支店共和洋諸樂器一般を販賣す。振替名古屋二四七八番

### 五二、佛 具

名古屋の佛具は相當古き歴史を有し、原料たる木材の豊富と工賃の低廉とは克く家内工業として發達し、藩政時代には其の製造數戸に限られしも維新後其の制解かれ、今や各分業の法に依り木地、堂作、彫物、塗師、蒔繪、箔押、金物等夫

夫異りたる職工に依つて製作せられ、並製品の製造増加すると共に上等品の製造も増加し、販路全國に汎く産額京阪地方を壓して百二十萬圓以上に上る。

### ひろ屋 高木仁右衛門

佛壇商の老舗にして本市東區七間町五丁目に店舗を有し、創業は遠く元祿八年なり。始祖は慶長年間金城の名古屋に築かれたる開府の當時士分より出て今の所に居を卜し、爾來三百年間連綿として今日の隆盛をなす。明治二十三年内國勸業博覽會の開かるゝや率先出品して以來大いに名古屋佛壇の聲價を博し、爾來共進會、展覽會等開催せらるゝ毎に出品受賞し、亦審査員たる事枚舉に遑あらず、往年桑港萬國博覽會に出品し銀賞を受く、今や全國は勿論遠く海外に販路を擴張し現在工場を江州醒ヶ井に設け、機械力に依りて佛壇本地の大量生産をなす木曾良材を原料とし、工賃の低廉なる點に於て他縣產品の追従を許さず。電話東五〇六九番



### 合名會社かざりや増田佛具店

西區本町五丁目に在り。元祿年間の創業にして斯業の開祖とも稱すべし。増田庄六氏の經營なりしを大正元年合名會社に改む。歴史の古きと共に設備整頓し、京阪、東京は元より全國的に確實なる取引を有し、永平寺、總持寺、増上寺は古き華客の一たり。寺院及び内佛向の佛具を作製し、其の製品は何れも美術的にして壯麗善美を盡す。

### 合名會社井上商店

中區末廣町二丁目に在り。元祿十五年縣下清洲より移住し、代々佛師たり。明治初年頃重兵衛九世に依りて佛壇佛具を兼營するに至りしが、明治十年頃より佛壇を廢し佛具を專業となす。大正九年合名會社井上商店を組織し、業務を之れに繼承し今日に至る、斯界に於ける老舗なり、商號を播摩屋と稱す。電話本局二〇〇三番、振替口座名古屋一一〇一番

### 五三、繙帶材料

繙帶材料の製産は創業年月淺く、漸く明治十七年頃陸軍衛戍病院に於て英國製品の輸入使用せられたるを當時太田孫左衛門、松村清輔氏等の着眼する所となり將來有望なるを看取し研究の結果、明治十七年頃始めて製造をなしたり。之れ本邦に於ける繙帶材料製造の嚆矢と唱へらる。爾來日清、日露、歐洲の大戦に遭逢し、長足の發展をなし、現在の製造業者三十七名、最近の製産額貳百萬圓を算し本邦に於ける製産地として内地の需要は勿論、海外各地に盛に輸出を見るに至りたり。

### 合名會社渡邊商店

西區押切町三丁目に在り。精製綿、精製ガーゼ、卷繙帶、其他繙帶材料の製造をなす。明治三十一年現代表社員渡邊松五郎氏によりて現在の地に創業せられ、大正六年九月今の合名會社に組織を改む、爾來年と共に隆盛を致し、工場の規模



優良品産出に於て本邦中屈指の製造會社に數へらるゝに至る。帝國陸海軍を始め赤十字社病院其他官公私立病院等の指定工場として聲望を馳す、年産額壹百萬圓内地は勿論海外に販路を有し、露西亞を主とし支那、滿洲、南洋方面に向つて盛んに輸出をなす。電話本局四七五六四番、七五六五番、振替口座名古屋三五六〇番

#### 太田合名會社

西區江中町二丁目に在り。明治十八年創業、本邦同業者中最古の歴史を有し精製綿、精製ガーゼ、巻軸繙帶等各種の繙帶材料を製造す。夙くより帝國軍隊及び赤十字社病院其他著名公私病院の指定工場たり。海外販路は露西亞を主とし、支那、南洋等に輸出し、本邦同業者中の白眉なり。電話本局四〇二番、支店大阪市東區平野町、電話本局二二七一番、代表者太田孫左衛門氏

#### 合名會社松村商店

本店工場共に東區添地町に在り。市内部を東區中市場町に設く、星印繙帶材料の製造元なり、製品の眞價に至つては既に斯界に喧傳せらる。商報月刊「まつむら」を發行し、敏活なる商機の報道をなし、潑刺たる經營をなす、代表社員松村清輔氏、取引銀行市内に本店を有する名古屋、明治兩銀行、三井、山口各支店、振替口座名古屋一八〇〇番、電略〇マ

#### 五四、護謨製品

護謨は今や日常生活に必要缺くべからず、需要日と共に増加し、各種の製品は如何なる山間僻地に於ても之を發見す。殊に當市は玩具、履物類、自轉車の生産地として名あり、護謨製品に關する工業は夙に早く當地に發達すべかりしなり。斯くて日東護謨製造株式會社大正七年八月、明治四十五年の交より中區牧野町にて事業を開始せる磯部惠太郎氏の事業を繼承し、更に大正十二年八月加藤兼三郎氏の事業を繼承して東區千種町字今池に千歲護謨製造株式會社組織せられ、兩社共自轉車タイヤ、押出物、型物等護謨製品一式の製造に従事しつゝあり。



### 日東護謨製造株式會社

中區牧野町に在り。名古屋驛より西方二丁。輸送上最も便利の地點にありて本市に於ける護謨工業の嚆矢なり。最新式機械に完全せる設備を以て優良品の生産をなす、主なる製品は各種タイヤ、ゴムピツカー、ゴム齒下駄、草履ゴム底、靴ゴム踵、諸機械用ゴム等なり、電話本局四八八四番

### 千歲護謨製造株式會社

明治三十八年南洋ジヨホール國に渡りゴムの栽培をなすこと十六年間、歸國後千歲護謨製造所を創立し、業務の發展と共に大正十二年八月現在の株式組織となし、工場の擴張を計り今日の隆盛を致す。自轉車タイヤ、押出物、型物、ゴム製品一式を製造す。本社及工場東區千種町今池、電話東二四六三番、社長加藤兼三郎氏なり。

### 五五、捺染

本市捺染の世に認めらるゝに至りしは、浪越形染社の發展後にして、同社は堀尾釜次郎氏の個人經營に係り、明治四十二年以來工場の全部に機械を使用し、今や樂色、圖案の進歩向上と共に益々需要増加し、前途大に發展せんとす。

### 浪越形染社 堀尾釜次郎

本邦捺染界の權威たる越越形染社は明治二十三年の創業にして、四十二年以降工場の全部を機械法に改め、内地向は勿論海外輸出向は廣幅更紗、無地染洋晒等年産額二百萬反以上を製出し、地質堅牢洗濯日光摩擦に對し褪色の憂なく、加ふるに意匠斬新時代の要求に應ぜんが爲研究に研鑽を重ね、各博覽會等に出品して常に最優第一位を占むるに至れり。

### 五六、玩具

玩具製造の沿革は明ならざるも、既に文化の頃他國に類を見ざる一種の紙鳶流行し、名古屋紙鳶と稱して一種の物産となるに至り、維新後貧窮せる士族等又盛



に之を製して他國に賣出せり。明治十五年頃より東京、大阪地方より斬新なる種々の玩具續々移入せられ、本市に於ても又製造を始むる者現はれ、次第に發達して紙製を第一とし、金屬製各種、人形綿細工、木製各種に互り獅子頭、提灯、紙製五月鯉、張貫達磨、水鐵砲、羽子板及び五月人形等最も多く製せられ、又陶器製玩具も産額多し。内地は勿論九州、臺灣、北海道方面に販路を有し、支那、米國等へも輸出す。

#### 合名會社 岩田商店

店舗は西區玉屋町三丁目にあり。代表者岩田芳之助氏なり。市内數箇所製造工場と其他多數の專屬する下職を有し、大量の生産販賣をなす、常に新案に意匠に小兒學童の習育に適合する斬新なる玩具の考案に留意進歩せる經營をなす、現に名古屋雛玩具商組合の組長たり。

#### 五七、鼻

緒

鼻緒は本市に於て古くより製造せられしが、微々として振はす、嘉永の頃傳馬町宮地茂助氏深く之を遺憾とし、屢々江戸に往來して商品を仕入れ、其の長所を採りて改良せんと欲し、小倉鼻緒に着目して之を本市に移入したるに色々好評を博したるを以て更に小倉織の生産地たる相生、足利地方の機業地を視察し之を模倣して名古屋附近の郡村に織らしめ、鼻緒を製造せしめたり。近年東京のレザーと共に名古屋の別珍製鼻緒は比を他に見ず、産額年々二百萬圓以上に達す。

#### 吉 高木合名會社

西區下園町四丁目に在り。明治二十八年十月の創業にして、別珍鼻緒の専門問屋として其の名高く、業務年々擴張せられ、今年産額七十萬圓、九百萬足を數へ販路全國に普く、品質の優良と意匠の斬新と價格の低廉とは、益々同社をして四方に活躍せしめ、名古屋産別珍鼻緒の天下をして旭日昇天の觀あらしむ。電話本局二一三〇番



### 服部商事株式会社

西區下園町四丁目に在り。大正九年三月の設立にして資本金五十萬圓、鼻緒の製造販賣及び足袋用別珍コイル天の販賣に従事す。同社製造の別珍鼻緒は特に品質優良、意匠斬新にして斯界に定評あり、年産額一千五百萬足、販路廣く全國に互る。而も常に製品の改良と販路の擴張とに努め、今や社運の一層隆々たるものあり。電話本局六一四番

### 五八、履物

本市特産の履物としては楳製塗下駄、板裏草履、栓下駄、籐裏草履、籐場下駄等とす。楳製塗下駄は今を去る五十餘年前傳馬町通り水野茂助なる者、初めて之を製造販賣したるが、隣國美濃に楳を多く産する關係上衰微する事なく、漸次發展して現時一ヶ年二百萬足の産額あり。板裏草履(八ツ折)は約二十年前より製造せられ、近時鐵工所等に於て歓迎を受け、産額次第に増加す。而して栓下駄は約

四十五年前より世に現はれ、新橋型、横濱型と形式を變じ現今に至る。産額四百五十萬足に達す。麻裏草履は四十五年前より製造せられ、明治四十四年來支那、滿洲、樺太方面に出荷あり、近時護謨靴流行の餘波を受け幾分不況の感あるも、尙年産額三百五十萬足に上る。籐表は明治二十七年の交、西區傳馬町中村七之助氏に依つて製造を開始せられ、約四十五萬足の年産額あり。

### 合名會社 長屋商店

西區傳馬町三丁目に在り。代表社員は長屋鉦太郎氏にして明治二十年三月創業し、大正十二年一月現在の合名會社に組織を改め業務を擴張す。近時實用的履物の製造に全力を注ぎ工場を西區數寄屋町に設くる等、斯界の權威として着々發展す。殊に同店發賣の專賣特許「毎日履」草履は今や盛に海外に輸出さる。電話本局一二一九番

### 名倉乙治商店



西區傳馬町一丁目に在り。十年前の創業にして、主として北海道産下駄材及び履物の製造販賣に従事し、下駄材販賣部を西區替地町に下駄材買入所を北海道旭川に有し、販路信州、北國及び伊勢、近江に互る。一ヶ年下駄百二十萬足、下駄材二萬石を取扱ひ、斯界に於ける新進の勇者として堂々活躍せり。電話本局一六九八番

### 五九、塗 箸

安永年間尾州藩の數奇屋坊主稻葉某始めて竹の塗箸を製作す。素より特殊の技術を要するにあらざるを以て爾來薄祿藩士の家族の内職となりて漸く發達し、遂に本市の特産品たるに至れり。既に安政の頃萱屋町鷺見竹次郎は製法巧にして遠く長崎へ輸出せりと云ふ。維新後益々發展し來りしが、粗製濫造の惡弊を生ぜしを以て、明治十七年一月塗箸問屋組合を組織し、製品の改良を圖り東京、大阪方面へ相當の賣行ありたるが、三十四年の頃復々濫造の傾向現はれたるを以て三十六年一月愛知塗箸同業組合を組織し、一々検査を行ひ信用を恢復し販路亦全國に

互り輸出をなす者さへ出づるに至る。産額大正十年に於て二十二萬八千圓に上る

### ⑥ 善 塗 箸 店

東區萱屋町一丁目に在り。明治十五年五月以來塗箸の製造販賣業を開始し、製法の改良、價格の低廉に留意し、店主自ら各地に赴きて販路を開拓し、今や關東關西に幾多の得意を獲得し、名古屋塗箸界の權威として尊重せられ、其の精巧優美なる製品はいづれも需要者に多大の満足を與へつゝあり。電話東二七五五番、店主後藤善兵衛氏

### 箸 鎌 商 店

東區水筒先町四ノ四に在り。創業は當主より三代前に始まり、其の間製品に幾多の改良を加へ、當主は専心製品の堅固、色彩の優美等優良品の生産に意を注ぎ其の産額は斯界第一位を占め、常に販路の擴張に努力し、其の製品は國內は勿論遠く海外に及び、今や塗箸界の重鎮として聲望頗る高し。電話東二六三一番、店



主今枝鎌藏氏

## 六〇、足袋

足袋は古くより自給自足の状態を續け、特に之が大規模に製造を業とせるものなかりしが、近來人口の増加と共に需用激増し、つちや足袋、福助足袋の如き工場工業として裕に存立する事を得、巧妙にして規模大なる廣告と共に斯界に大を稱へつゝあり。我が名古屋に於ける足袋の製造も之と軌を一にし、紐付黒底足袋より發足し近時は殆んど全部をミシンにて縫ひ從來の手縫を見ること稀なり。而して裏地にネルを用ふるに至りしは約二十年前、別珍、コールテンの使用は七八年以前のこととし、漸次社會の奢侈に従ひ、絹足袋、襦子足袋の需要増加せんとす現在製造戸數八十戸あり。

### 吉見株式會社

東區中市場町三丁目に在り。大正五年の設立にして販路東海、北陸及び九州、

伊勢方面に及び、一ヶ年の製造高五十萬足に達す。主として優等品を製造し、福助足袋等と各地に於て競争しつゝあり。之が勝敗は單に同社の運命に關するのみならず、又廣く名古屋足袋の死活に關する問題として注視され、一同其の健闘を祈れり。電話東一一八三番

### 株式會社 西川商店

毘沙門足袋の製造元にして、中區末廣町一丁目に在り。南武平町に工場を有し明治四十一年開店以來漸次擴張して大正十一年株式會社に組織を變更す。社長自ら職工と共に奮闘し一足毎に製品番號を附し、以て工程に關する責任を無限に負ふが故に其の製品は優良價格は低廉、安んじて何人も之と取引を開始する事を得  
電話本局五八二六番



大正十二年十月三十一日印刷  
大正十二年十一月一日發行

名古屋商業會議所

三浦一

發行者

名古屋市中區千早町五丁目

山田良弼

印刷者

名古屋市中區千早町五丁目

株式會社一誠社

印刷所





編所議會業商屋古石



393  
594



終

